七ケ浜町文化財調査報告書第５集

大木囲貝塚

—昭和53年度環境整備調査報告—

宮城県宮城郡

七ケ浜町教育委員会

序

大木囲貝塚は、昭和43年３月18日、国の史跡として指定告示され、直ちに昭和43年度より用地の買収を開始し、昭和46年２月先行投資によりほゞ全面的に買収した。史跡面積は約20万m² ある。昭和49年度までには、国庫補助、県費補助をうけ土地買上費の支払いを完了した。

貝塚は七ケ浜町ではいたるところにみられるが、世界的には数少いものである。貝塚は他の遺跡にくらべ、動物の遺物がよく残っていて、大昔の人々の生活を知る上で、これほど良い遺跡はない。

大木囲貝塚は、面積が広大なだけでなく、昨年度の調査でも私たちを驚かせたように、数千年の歴史が、５～６ｍの厚で、何十層にもなって、広大な地域に埋蔵されているのである。

この貴重な遺跡を保存し、活用をはかるため昭和47年度より環境整備事業を開始した。本年度は、見学者のために、便所、水飲場、ベンチ野外卓を設け、広場をその周囲に造成した。また、整備の全体計画の再検討を行った。

昨年に引続き行われた事業は、史跡境界に沿って囲柵を延長し、土地侵害を防ぎ管理しやすいようにすること、植栽並びに伐開、試掘調査等である。

植物については、昨年中条幸氏により植生調査等の報告がなされた。今年度は植物全般にわたって中条氏に御指導をいただいた。

試掘調査は、昨年は余り深くなったため作業が困難となり、一時中止し、危険防止等の準備を整え、本年度再び同地点を掘下げた。

調査の結果、深さは６ｍにも及び非常に良好な貝層を発見することができた。資料は多量なので未整理のものが大部分である。事業全体の進行、調査のお世話、報告書の編集に終始した八巻正文氏の努力に感謝いたします。

末筆ながら、この環境整備事業を御指導下さった東北大学名誉教授伊東信雄氏並びに環境整備指導委員会の委員の方々に深甚なる感謝を捧げます。

七ケ浜町教育委員会　教育長　三　浦　作兵衛

大木囲貝塚環境整備指導委員

伊東信雄	東北大学名誉教授	考古学
加藤　孝	東北学院大学教授	考古学
興野義一	医師	考古学
佐々木嘉彦	東北大学教授	建築学
芹沢長介	東北大学教授	考古学
丸田頼一	千葉大学助教授	造園学

目　　次

頁

Ⅰ．調査概略……八巻　正文……1

Ⅱ．貝器……岩渕　康治……7

Ⅲ．骨角器……　〃　……19

Ⅳ．石　器……梶原　　洋……24

Ⅴ．ウミガメ……佐久間　豊……33

Ⅰ．調　査　概　略

Ａ．大木囲貝塚の位置（図版Ⅰ）

北緯38°17′58″から18′15″の間、東経141°２′36″から３′３″の間。 地籍は宮城県宮城郡七ケ浜町大字東宮浜字東大木、西大木、北下方、南下方の四つの小字にまたがる。25,000分の１地形「しおがま」

Ｂ．調査の目的（図版Ⅱ）

今年度は２つの調査を行った。

１．試掘調査

これは昭和52年度に調査したCS77地区をさらに深くまで掘さげ、大木２、１式期の貝層を確認するために行われた。昭和52年度の調査では大木６、５、４、３式土器が深さ2.5ｍにわたって層位的に出土し、その報告はすでになされている（八巻正文他　1979)。また、この調査は貝層断面の展示のために行われたものであり、貝層展示計画についても上述の報告書ですでに説明した（八巻正文他　1979　ｐｐ．１－２)。

２．遺構確認調査

今年度の環境整備事業の１つとして、史跡の正門付近に、便所、水飲場を設置することとなり、遺構確認調査を行った。

便所の位置については、佐々木嘉彦博士及び仙台市野草園他の御指導をいただいた。利用しやすい場所にないと便所があっても利用せず、園内のあちこちに大小便をすることとなり不衛生である。低い場所、見えにくい場所にあった場合利用しにくい。また見学者は園内に入ると先ず便所に入るのが普通であり、正門付近がのぞましい。また公園の便所で女性が痴漢に襲われた例もあり、管理しやすい場所でなければならない。BA80付近は以上の条件に合う地域であり、分布調査でも埋蔵貝層がなく（福田友之　1973)、地表にも貝殻や土器は散布していないことは調査ずみであった（八巻正文　1974)が、今年度の整備事業に先だち、検土杖によるボーリング調査、次に表土をはぎ遺構の有無を確認することとした。

水飲場のまわりには、ベンチ・野外卓を設置することとなり、BG73地区を中心に遺構確認調査を行った。

ベンチ、野外卓はCA60付近にもおくこととなり、確認調査を行った。

Ｃ．調査関係者

調査責任者　伊東信雄

調査員　八巻正文

参加学生　東北大学大学院―小林和彦、梶原　洋、平野信一、松本秀明、宮城豊彦。東北大学―菅沼　健、小川　出、奥村吉信、斉藤曜一、田村吉久、丸　力也、須田良平。東北福祉大学―船山政志。宮城学院女子大学―宮沢真弓、加賀やす子、中鉢恵子、遠藤裕子、川村えり子、岡部博美、小森敦子、篠木多恵子。宮城学院女子短期大学―庄子弘子、上野一恵、吉田真美。宮城ドレスメーカー専門学校―宮沢浩美。東北学院大学―佐藤壮一、阿蘇幸二、坂　忠彦。

作業員　佐藤鋼治、高橋　鉄、阿部はるえ、佐藤千秋、佐藤とみ子、佐藤みちの、佐藤ミノル、鈴木うん、鈴木けさの、鈴木とめ、我妻エイ子。

協力　東北大学理学部地理学教室―西村嘉助、小元久仁夫、中田　高、岩渕康治、佐久間豊。

D．地区設定（図版Ⅱ）

史跡全域を方眼に地区割した。海に向って舌状につき出ている丘の背に縦軸を設け、この縦軸を3m単位でくぎり、南から北へアルファベットA～Tの記号を付ける。これだけでは60mにしかならない。そこでさらにその上の単位として60mごとにA、B、C…の記号を付ける。縦軸に直交する横軸も3m単位で区切り、記号として数字を東から西に1～99を3mごとに付ける。しかしこれだけでは史跡全域をおおうことができない。そこで東部地域には最初にEを冠し、西部地域にはWを冠することとする。例えば西部地域の地点、区はWA00のように表わす。基準の石標はCA70地点及びFA70地点の2ケ所に設けてある。

E．調査方法及び結果（図版Ⅲ）

1．試掘調査（CS77区）

発掘は主として小林和彦が当った。2×1mの発掘区を8等分し、それらの小区に①～⑧の番号をつけ、土はすべて採取した。昨年大木6、5、4、3式土器が順次層位的に出土したが今年度は予想通り、大木2、1式土器がさらに下層より出土し、貝層も極めて良好であった。深さは昨年掘った深さからさらに2m掘り下げたので地表からの深さは6mにも及んだ。

昭和52年・53年の2年間にわたる発掘の結果2×1mの小さな発掘区ではあるが、大木1～6式土器が約5.5mにわたつて層位的に出土した。まさに展示にあたいする地点の発見である。

採取した土は1間×1間の小屋に入り切らなかった。この土は4段階の篩をつかい水こしし、遺物を収集している。篩が1組しかなく、この作業は未だ終らない。

2．遺構確認調査

発掘区は、AT74、75、76、77、78、BA74、75、76、77、78、BB74、75、76、77、78、BD73、74、BE73、74、BF73、74、75、BG73、74、BI73、76、BS58、61、BT61区である。

いずれの区にも遺構は認められなかった。地山も浅く、遺物も数点にすぎない。

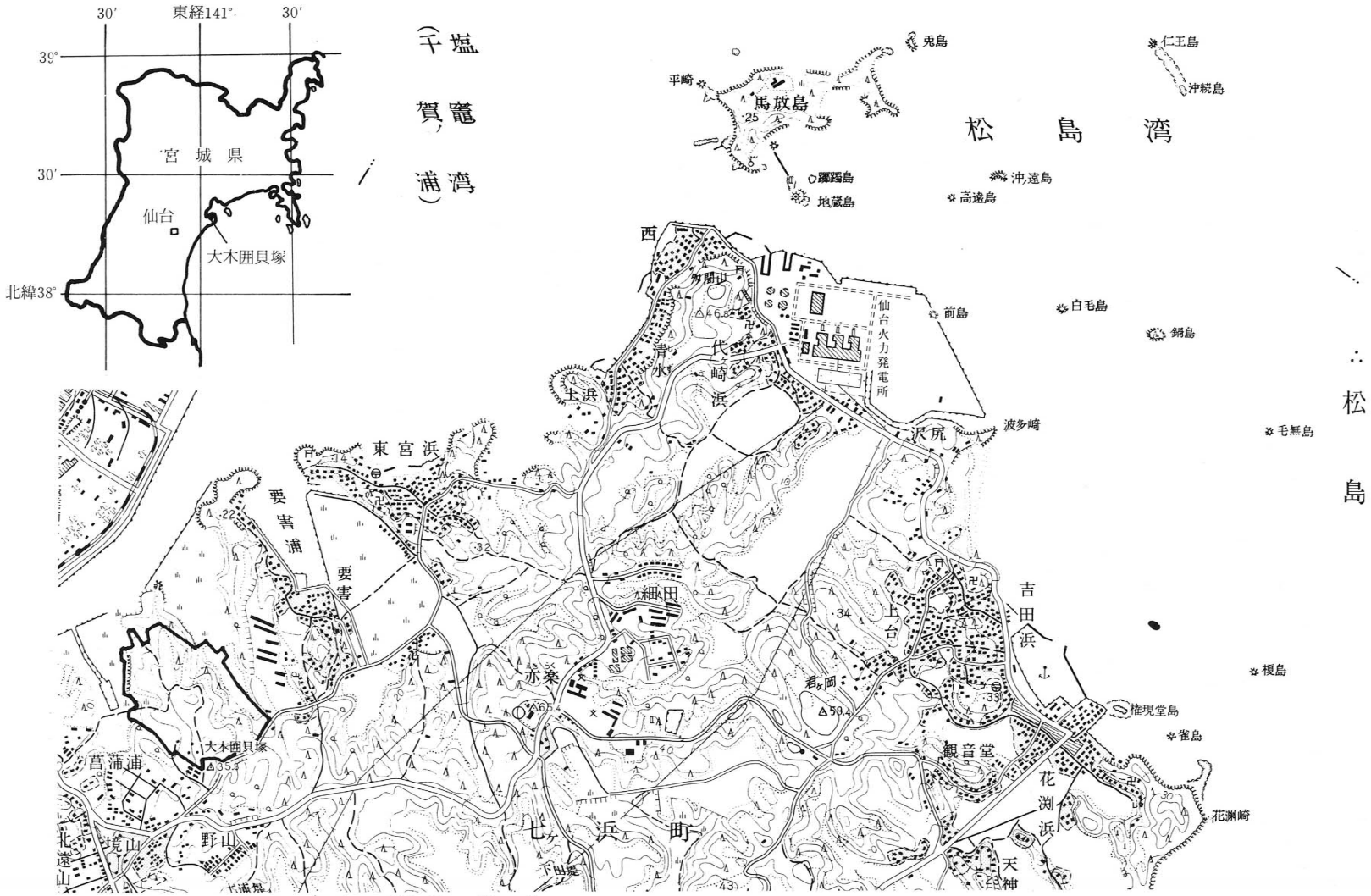
（八巻正文）

引　用　文　献

福田友之　1973（昭和48年）史跡大木囲貝塚環境整備調査報告書Ⅰ　七ケ浜町文化財調査報告書第1集　宮城県七ケ浜町教育委員会

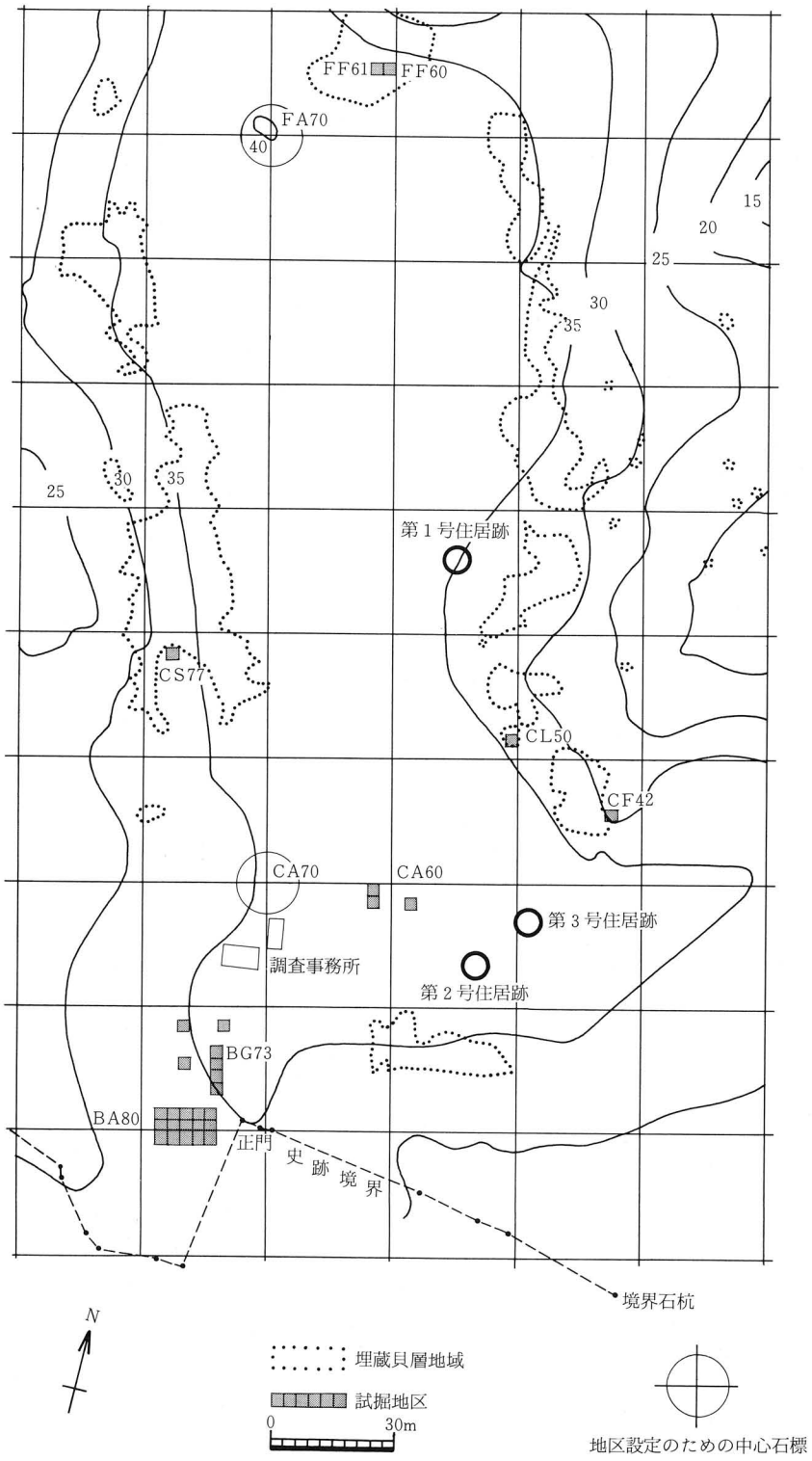
八巻正文　千葉英一　1974（昭和49年）史跡大木囲貝塚環境整備調査報告書Ⅱ　七ケ浜町文化財調査報告書第2集　七ケ浜町教育委員会

八巻正文　小林和彦　岩渕康治　梶原　洋　1979（昭和54年）大木囲貝塚―昭和52年度環境整備調査報告―七ケ浜町文化財調査報告第4集　七ケ浜町教育委員会

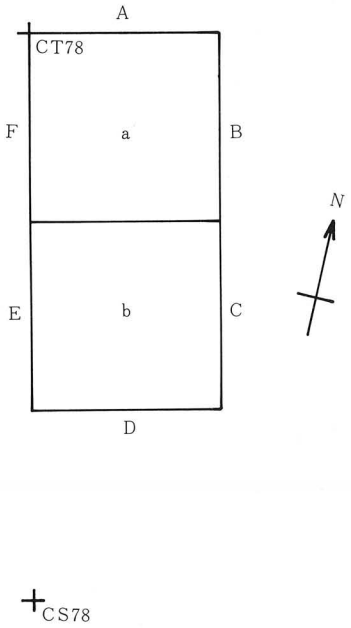


1：25,000　建設省国土地理院承認済〔承認番号〕昭47. 第6568号

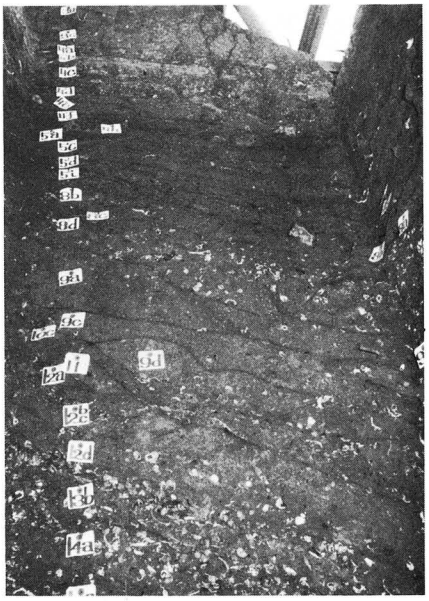
図版Ⅰ　大木囲貝塚の位置　黒線内が史跡指定地域

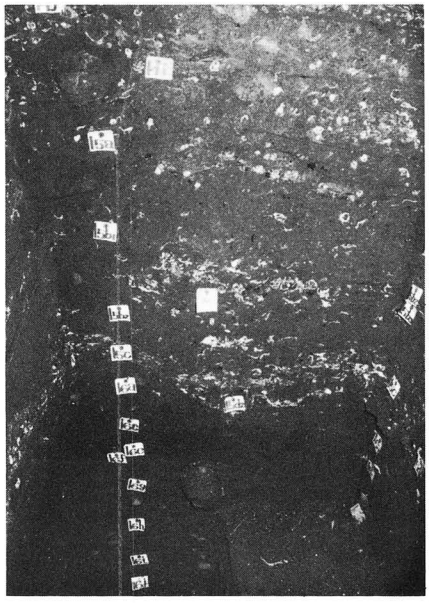


図版Ⅱ　昭和53年度調査地区図



1. CS77地区の発掘範囲（1×2m）
断面の名称はA，B，C，D，E，Fとした





2. 断面Dの写真

図版Ⅲ　CS77地区

II. 貝　　器

CS 77 地点下層と CL50 地点（昭和50年度調査分）とをまとめて記載し、昭和52年度調査の CS 77 地点上層との比較も試みたい。

イ. 貝　刃（図版Ⅳ～Ⅷ、X、XI）

〈CS77 地点下層〉総数41点出土。内、28点が完形。素材は、ハマグリ28点、チョウセンハマグリ12点、オオノガイ１点である。上層の場合は、ハマグリとチョウセンハマグリの比率がほぼ同数だったが、この場合はハマグリが70％を占めている。オオノガイ製のものは当貝塚では初見である。腹縁部にきわめて細かいリタッチが観察される。LR は上層同様ほぼ同数で、殻種は貝刃の製作には特に関連はないと見られる。殻長は、表２で見るように60～69mmのものが最も多く、掘野論文で紹介されている南境貝塚出土例（掘野、1971）と比較してみるとやや小型のものが多いようである。形態分類の特徴としては、上層の場合とほぼ同様の傾向が指摘できるので重複する記載は避ける。(昭和52年度調査報告参照）腹縁 1/2 調整、片面調整、一移調整など調整が簡易化された個体が上層の場合と比較してふえているのは、素材において、小型のハマグリの比率がふえていることと関連があろう。一般に調整が入念に施されるのは、大型もしくは殻の厚い素材などによく見られ、長40～50mmの小型のハマグリの場合は刃部の範囲も狭く、おおむね簡易な調整で終っている。従って刃部の調整のちがいは素材の大きさや殻の厚さのちがいを物語るもので、特に機能的なちがいを物語るものとは思われない。なお、これらの刃部の剝離状態は、石匙やスクレーパーなどの剝片石器の縁辺に見られる剝離状態とも類似する部分があるため、従来、これら石器の代用品的機能も類推されているのであるが、明確に使用痕の観察される例を１点紹

表１　大木囲貝塚出土貝刃殻長分類表

地点 / 貝殻長	CS 77 上層		CS 77 下層		CL 50		計
	ハマグリ	チョウセンハマグリ	ハマグリ	チョウセンハマグリ	ハマグリ	チョウセンハマグリ	
80mm以上		2		2			4
75～79		2	2	3			7
70～74		4	2	1			7
65～69	1	3	9	3			16
60～64	3		7	2	3		15
55～59	5		4		1		10
50～54	2	1	1				4
45～49	1				1		2
40mm以下	1				1		2
破片	8	8	2	1	1	2	22
不明			1				1
計	21	20	27	12	7	2	90

※オオノガイ１点は除く

表2　大木囲貝塚ＣＳ77下層，ＣＬ50出土貝刃分類表

刃部の位置	調整	刃部状態	刃幅	数量	素材			土器型式				CL50
					ハマグリ	チョウセンハマグリ	オオノガイ	大木3	大木2b,3	大木2a～3	大木1～3	(大木2a)
A. 腹縁全般 (17点)	a. 両面 (7)	イ. 二段 (4)	①2mm以上	3	1	2			3			
			②2mm以下	1	1			1				
		ロ. 一段 (3)	① 〃 以上	1		1			1			
			② 〃 以下	2	1	1		1	1			
	b. 片面 (10)	イ. 二段 (7)	① 〃 以上	4	2	2		2	1		1	3
			② 〃 以下	3	3			2	1			
		ロ. 一段 (3)	① 〃 以上	2	2			1			1	
			② 〃 以下	1	1			1				1
B. 腹縁3/4 (3点)	b. 片面 (3)	イ. 二段 (3)	① 〃 以上	2		2		1			1	
			② 〃 以下	1	1			1				
C. 腹縁1/2 (4点)	a. 両面(1)	イ. 一段 (1)	② 〃 以下	1	1				1			
	b. 片面 (3)	イ. 二段 (1)	① 〃 以上	1	1				1			1
		ロ. 一段 (2)	② 〃 以下	2	2			1			1	
D. 破損品 (17点)	a. 両面 (7)	イ. 二段 (7)	① 〃 以上	5	2	3		1	3	1		
			② 〃 以下	2	2			1		1		
	b. 片面 (10)	イ. 二段 (7)	① 〃 以上	4	3	1		1	3			3
			② 〃 以下	3	3			1	1		1	
		ロ. 一段 (3)	① 〃 以上	1	1			1				
			② 〃 以下	2	1		1	1	1			1
合計	a. 15	イ. 29	① 23	41	28	12	1	17	17	2	5	9
	b. 26	ロ. 12	② 18									

介しておきたい。30は、刃部2/3ほどを欠損しているが、ハマグリとしてはやや大型の素材で、腹縁部での殻厚も3.5mmと厚く、刃部調整も表裏両面にわたり入念に施された形跡が認められる。刃部は使用の為、相当に摩耗し、先端部の鋭利さは失われ、幅1mmほどの厚さになっている。そしてこの部分では、刃部に直角方向の擦痕（使用痕）を明瞭に観察することができた。これは、特に刃部右端部で顕著であった。このことは、貝刃の使用に際して、刃部に対して直角方向の力を働かせたものということができる。このような機能は、従来いわれている石匙やスクレーパー的な機能とは異質のものということができよう。刃部のすりへり方から見れば、土器などの比較的やわらかいものの器壁を整形する際生じたような印象を受ける。ただし、このように明瞭に擦痕を確認できた例はほとんどこの1点のみであり、これでもってすべての貝刃にこのような機能を想定することはいまだ早計というべきであろう。類例の増加を待ちたいところである。

〈CL 50 地点〉この地点は貝層が薄く大木2a式の単一層と見られている。CS 77 地点出土のも

のは大木2b式以降のものが多いので、この地点はやや古い時期のものと考えてよい。計９点出土し、完形品は５点である。素材はハマグリが７点で、他は小片のため不明である。調整はいずれも片面調整で比較的簡易である。

なお、貝刃には内外いずれかの面に有機物が付着しているものが多く見られるが、この現象は特に貝刃に限定したことではないので貝層の堆積過程において化学的現象として付着したものと思われる。

〈文献〉

○「昭和52年度大木囲貝塚環境整備調査報告書」―貝器―七ケ浜町教委（1979）

○堀野宗俊「仙台湾周辺貝塚発見の貝刃について」（『仙台湾』創刊号、1971）

ロ．貝　輪（図版Ⅸ、Ⅻ）

〈CS 77 下層〉７点、〈CS 77 上層〉５点、〈CL 50〉２点出土。素材はイタボガキ10点、マガキ、ベンケイガイ、サルボウ、カズラガイ各１点である。完形品は２点で、他はすべて破片であるが、いずれも本来は輪状を呈するものの一部と考えられる。輪の幅は、マガキ、イタボガキ製のもので10～20mmでほぼ一定している。殻の固い二枚貝の場合は10mm内外である。全般に粗雑な調整のものが多いが６、９、10は入念な研磨が全体に施され、美麗である。11はカズラガイの腹縁部を切りとったもので、切除した部分を研磨しているが、用途は不明である。８はイタボガキの殻頂部に、主として内面から刺突、穿孔したもので研磨調整などは全くない。この種のものを貝輪の未成品とする説もあるが、確証はない。

表３　貝輪一覧表

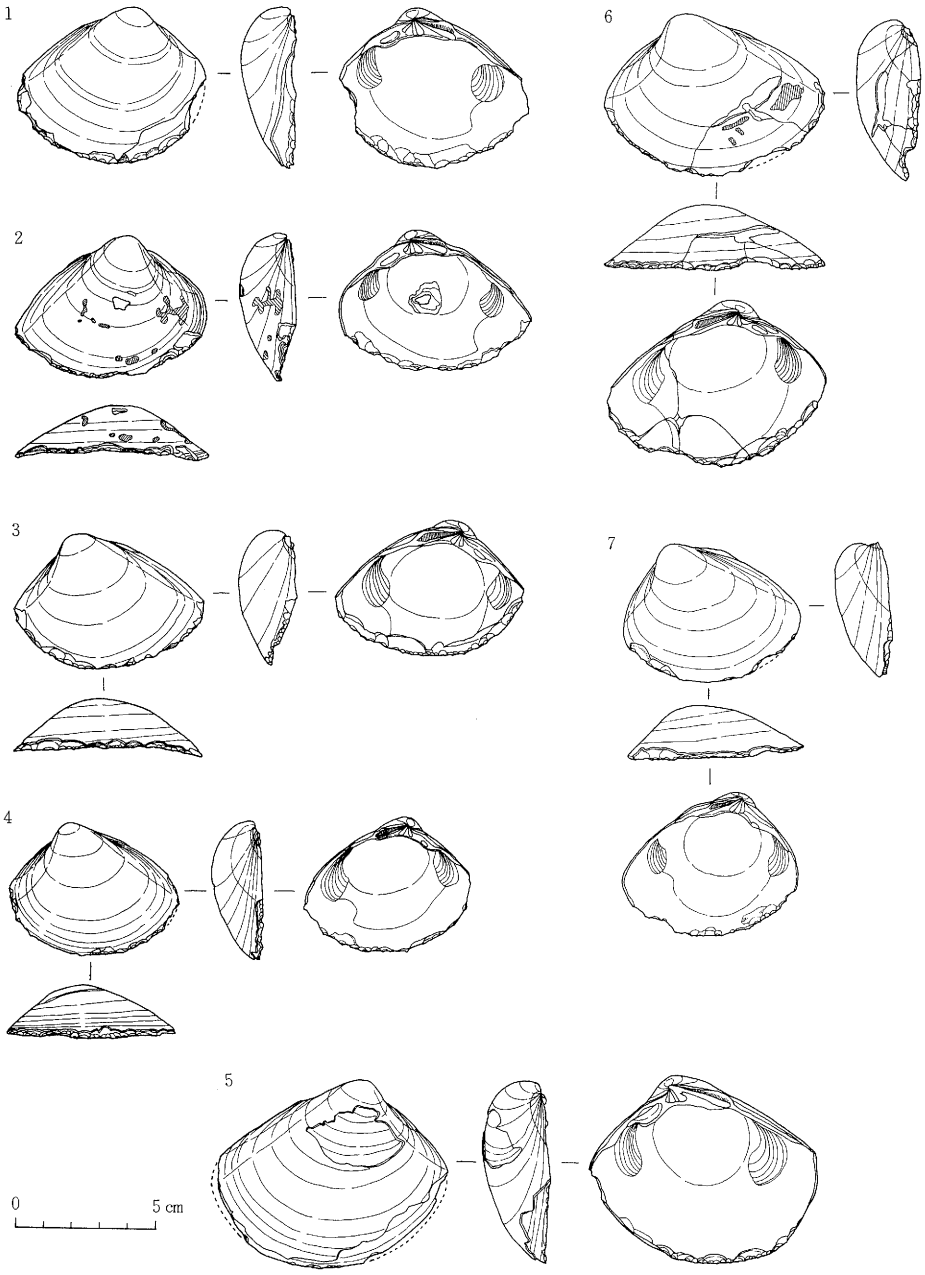
〈CS77下層〉

図No.	層　位	土器型式	素　材	殻	形	研磨調整	縦×横	内径	幅	備　考
1	西壁，L6a	大　木　4	イタボガキ	R？	輪　状	縁　辺	67×33mm	40 mm	14～18mm	2/3欠。壁整形時上層より出土〈写真１〉
2	〃	〃	〃	R	〃	外　縁	(61)×(31)	？	14～19	3/4欠。　〃　〈写真２〉
3	西壁，L8d	大木３，４	マ　ガ　キ	L	〃	〃（簡易）	92×76	49×38	14～24	〃　〈写真３〉
4	〃	〃	イタボガキ	？	〃	縁辺全般	(60)×(23)	？	14～18	3/4欠。　〃
5	L14b	大　木　3	〃	？	〃	全　面	(40)×(14)	？	11～12	
6	L14c	〃	〃	L	〃	〃	(31)×61	42	10～15	2/3欠。　〈写真４〉
7	L14g	大木2a～3	〃	？	〃	縁　辺	(30)×(30)	？	10～11	3/4欠。
8	L14h	大　木　3	〃	R？	〃	〃	(28)×(33)	？	10～12	3/4欠。
9	西壁，L9b	〃	ベンケイガイ	R	〃	全　面	(20)×(55)	？	7～8	2/3欠。壁整形時上層より出土〈写真５〉
10	L14f	大木2b，3	サ　ル　ボ　ウ	〃	〃	〃	(45)×(23)	？	8～14	3/4欠。　〈写真６〉
11	L16b	大　木　1	カズラガイ	？	？	切除面	54×16	？	4.5～7	〈写真７〉
12	L14g	大木2a～3	イタボガキ	R	中央部穿孔	無	78×56	7×10		〈写真８〉

〈CL50〉

13	L２	大　木　2a	イタボガキ	？	輪　状	縁　辺	(68)×(37)	？	15～19	2/3欠。摩耗　〈写真９〉
14	L２b	〃	〃	？	〃	〃（簡易）	(65)×(26)	？	12～17	2/3欠。　〈写真10〉

※（　）内の数値は破損部の現況値

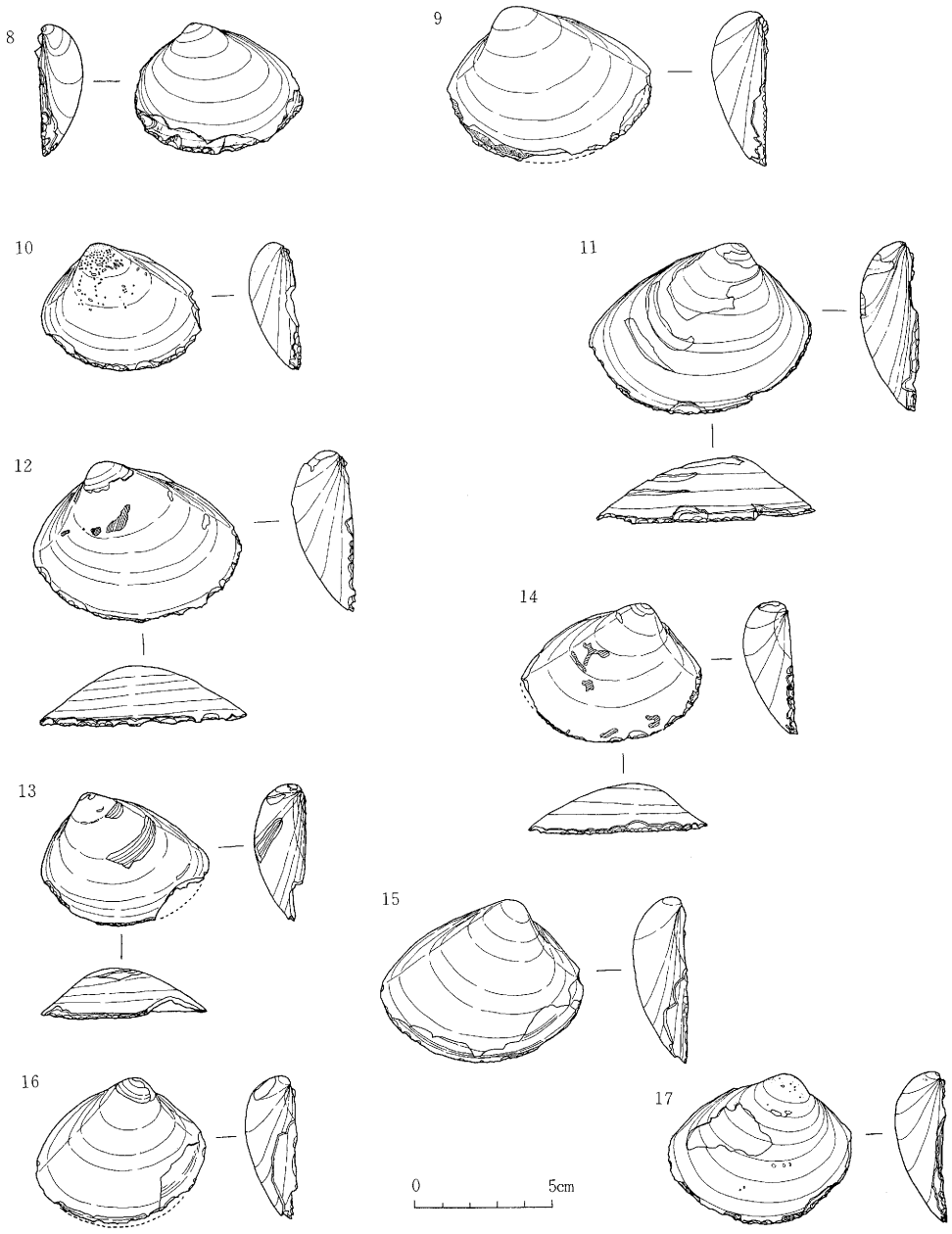


図版Ⅳ　貝 刃 図 (1)

表4　貝　刃　一　覧　表　(1)

〈CS77下層〉

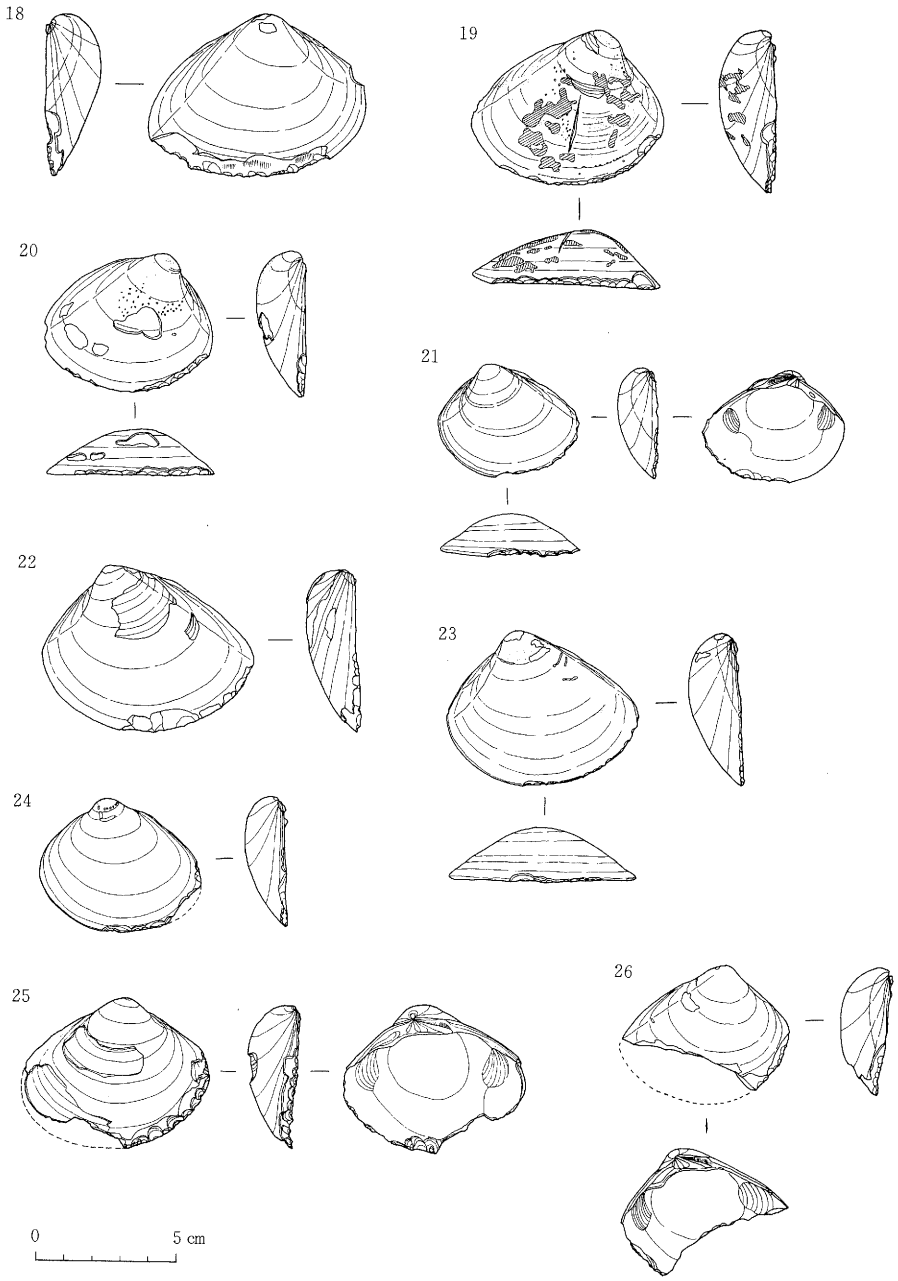
図No.	層　位	土器型式	素　　材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃　幅	長×径	備　　考	
1	L14e	大木2b, 3	チョウセンハマグリ	R	腹縁全般	両面	二　段	1.5～9(mm)	67×58	摩耗	
2	L14e	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	〃	1～5	68×51	殻表中央部穿孔, 光沢	〈写真1〉
3	L14e	大木2b, 3	チョウセンハマグリ	L	〃	〃	〃	1～3	67×49	摩耗	〈写真2〉
4	L14h	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	〃	0～2	60×48		〈写真3〉
5	L14e	大木2b, 3	チョウセンハマグリ	R	〃	〃	一　段	2～7.5	82×69	リタッチなし, 刃部2/3破損	
6	L14h	大　木　3	チョウセンハマグリ	L	〃	〃	〃	0～1	78×58	やや摩耗	
7	L14f	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	〃	0～2.5	63×51	光沢	



図版Ⅴ　貝 刃 図 (2)

表5　貝刃一覧表 (2)

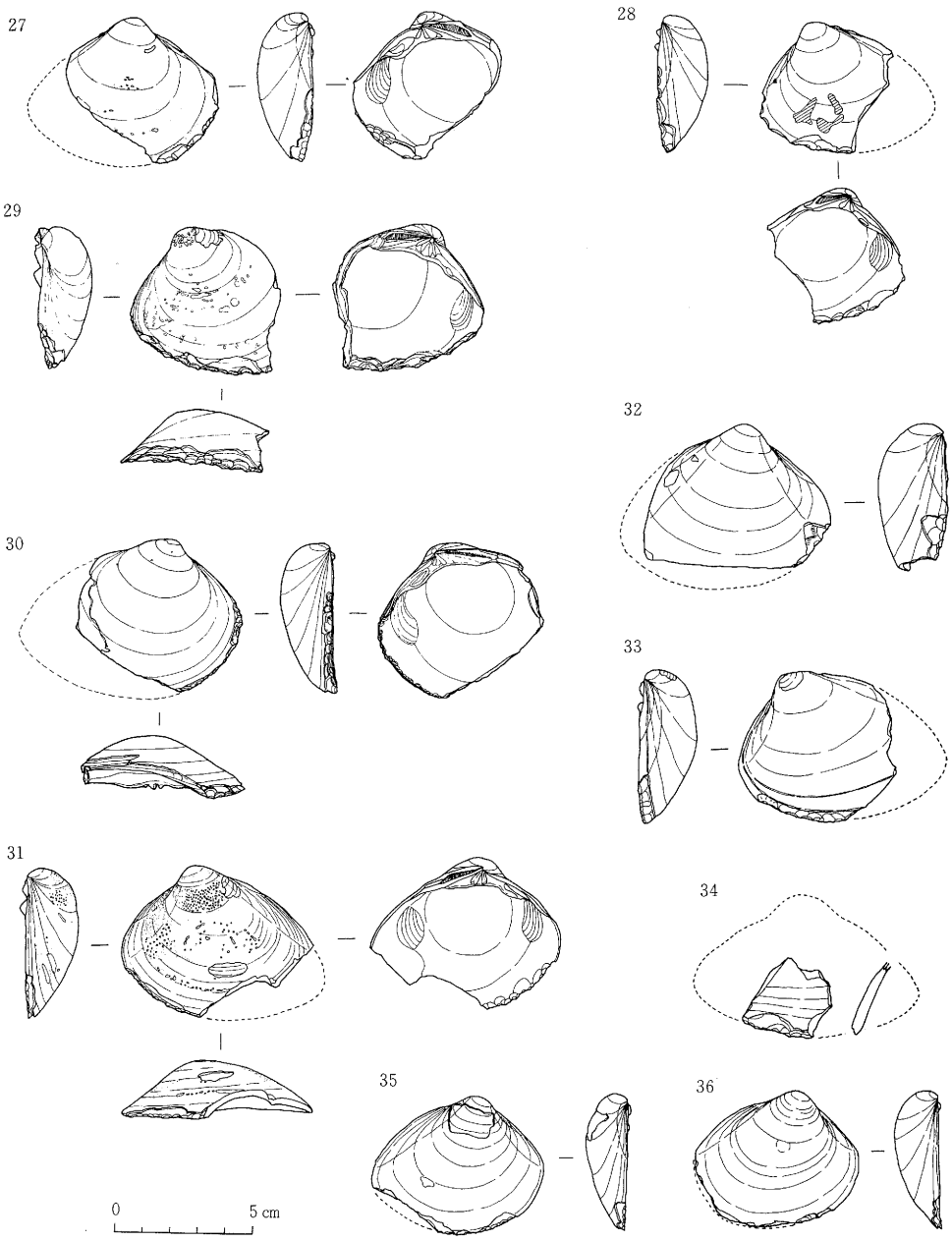
図No.	層　位	土器型式	素　　材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃　幅	長×径	備　　考	
8	L14a1	大　木　3	チョウセンハマグリ	L	腹縁全般	片面	二　段	2～8(mm)	61×49	光沢	
9	L14d	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	〃	1.5～5	74×57	光沢	〈写真4〉
10	L14e	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	〃	1～3	58×47	摩耗，灰，有機物付着	
11	L15a	大木1～3	チョウセンハマグリ	R	〃	〃	〃	1～3	81×60	摩耗	〈写真5〉
12	L14a1	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	〃	1～2	76×59	摩耗	〈写真6〉
13	L14d	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	〃	0.5～1.5	60×49	摩耗	
14	L14e	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	〃	0.5～2	66×52	摩耗	
15	L14h	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	一　段	2～10	73×61	リタッチなし，やや摩耗	
16	L15a	大木1～3	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	〃	2～10	62×53	腹縁3/4欠，やや摩耗	
17	L14a1	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	〃	0～2	66×55	摩耗	



図版Ⅵ　貝 刃 図 (3)

表6　貝刃一覧表 (3)

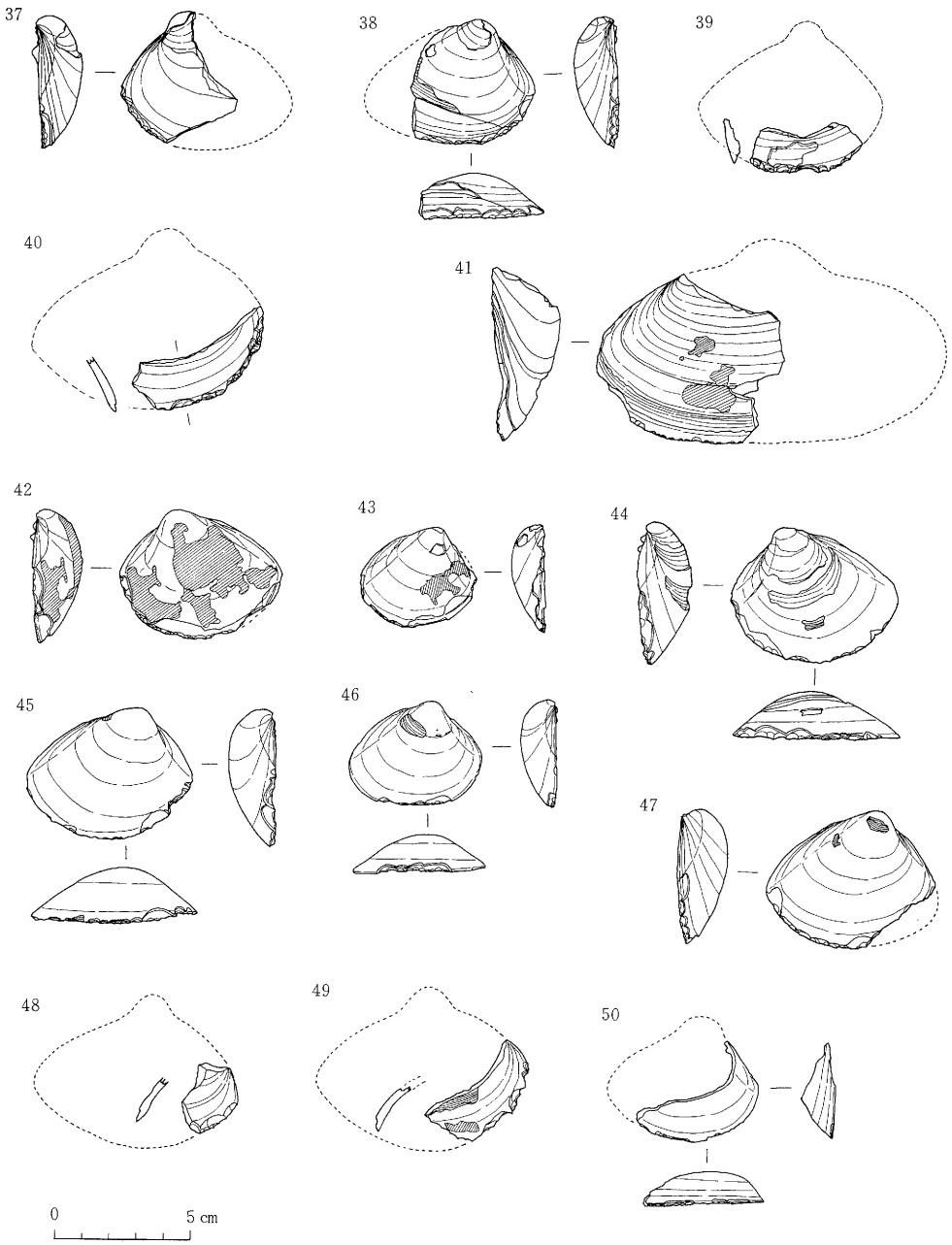
図No.	層　位	土器型式	素　　材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃　　幅	長×径	備　　考	
18	L15a	大木1～3	チョウセンハマグリ	R	腹縁左 3/4	片面	二　段	4～7.5(mm)	78×59	摩耗	
19	L14d	大　木　3	チョウセンハマグリ	R	腹縁右 3/4	片面	二　段	1～3	69×58	摩耗，有機物付着	〈写真7〉
20	L14d	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	R	〃	片面	二　段	0～2	60×50	摩耗	
21	L14e	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	L	腹縁右 1/2	両面	一　段	0～1	50×40	光沢	〈写真8〉
22	L14e	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	片面	二　段	1.5～6.5	76×60	摩耗	
23	L15a	大木1～3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	片面	一　段	0～1	68×56	やや摩耗	
24	L14c	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	L	〃	片面	一　段	2	58×48	刃部端やや摩耗	
25	L14d	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	R	?	両面	二　段	2～5	65×54	腹縁 1/2 欠	
26	L14f	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	R	?	両面	二　段	2～5.5	60×(45)	腹縁 2/3 欠	



図版Ⅶ　貝 刃 図 (4)

表７　貝刃一覧表 (4)

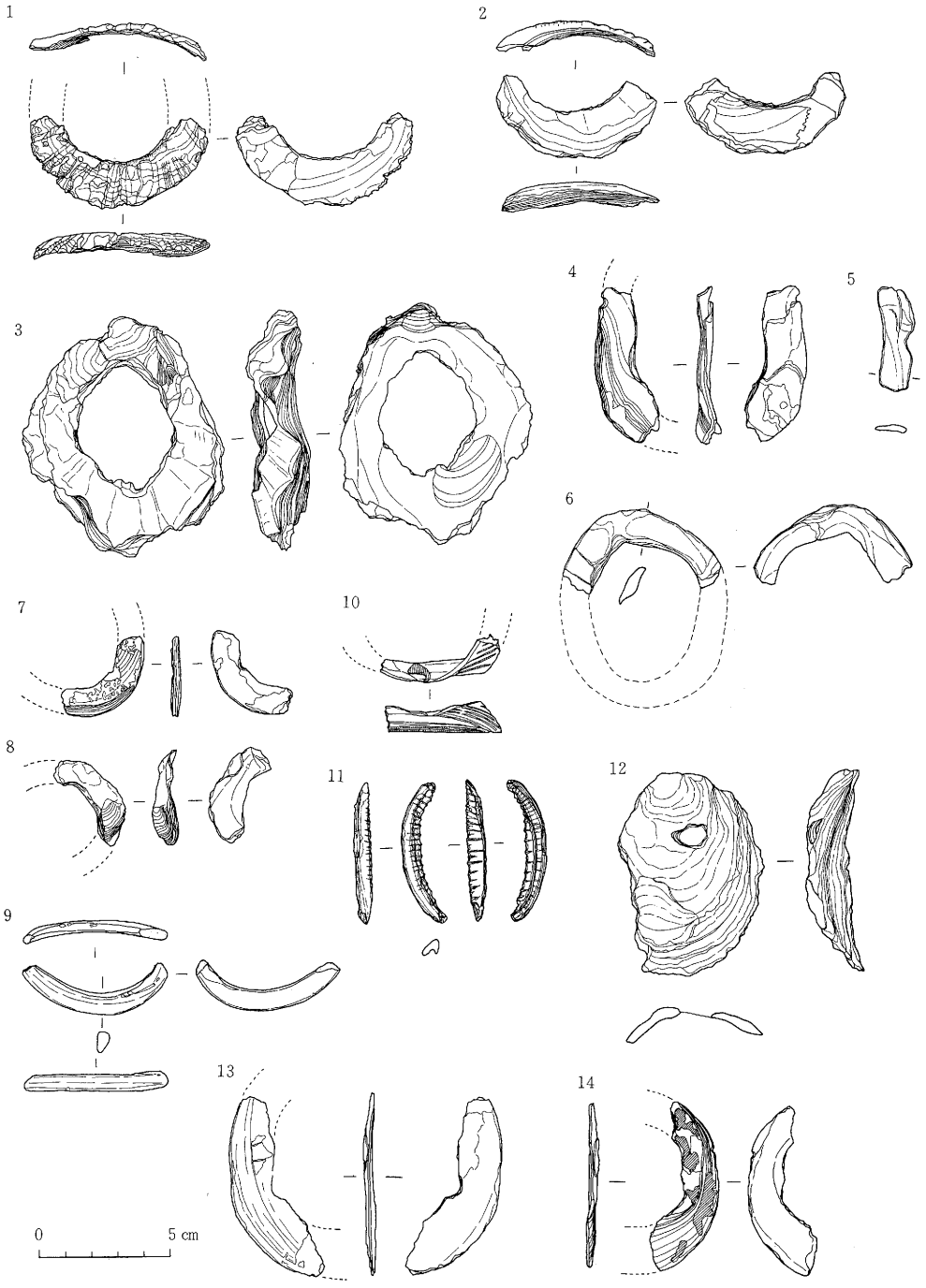
図No.	層　位	土器型式	素　　材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃　幅	長×径	備　　考	
27	L14f	大木２b, 3	チョウセンハマグリ	R	?	両面	二　段	1～4(mm)	(57)×57	腹縁 2/3 欠。摩耗	
28	L14f	大木２b, 3	チョウセンハマグリ	L	?	〃	〃	1～5	(62)×50	腹縁 1/2 欠　〃	
29	L14g	大木2a～３	チョウセンハマグリ	L	?	〃	〃	2～6.5	(64)×60	腹縁 1/3 欠	
30	L14d	大　木　３	ハ　マ　グ　リ	R	?	〃	〃	1～2	(61)×55	刃部に擦痕，腹縁 2/3 欠	〈写真９〉
31	L14g	大木2a～３	ハ　マ　グ　リ	L	?	〃	〃	1～2.5	69×56	腹縁1/2 欠。摩耗	
32	L14h	大　木　３	ハ　マ　グ　リ	R	?	片面	〃	1～8	(67)×(52)	摩耗	
33	L14e	大木２b, 3	ハ　マ　グ　リ	L	?	〃	〃	2～3	(59)×58	腹縁1/2欠。光沢	
34	L14e	大木２b, 3	チョウセンハマグリ	L？	?	〃	〃	2～5.5	(30)×(28)	破片。摩耗	
35	L14f	大木２b, 3	ハ　マ　グ　リ	R	?	〃	〃	1.5～3	63×52	腹縁1/3欠。光沢	
36	L14d	大　木　３	ハ　マ　グ　リ	R	?	〃	〃	0～1.5	59×50	光沢	



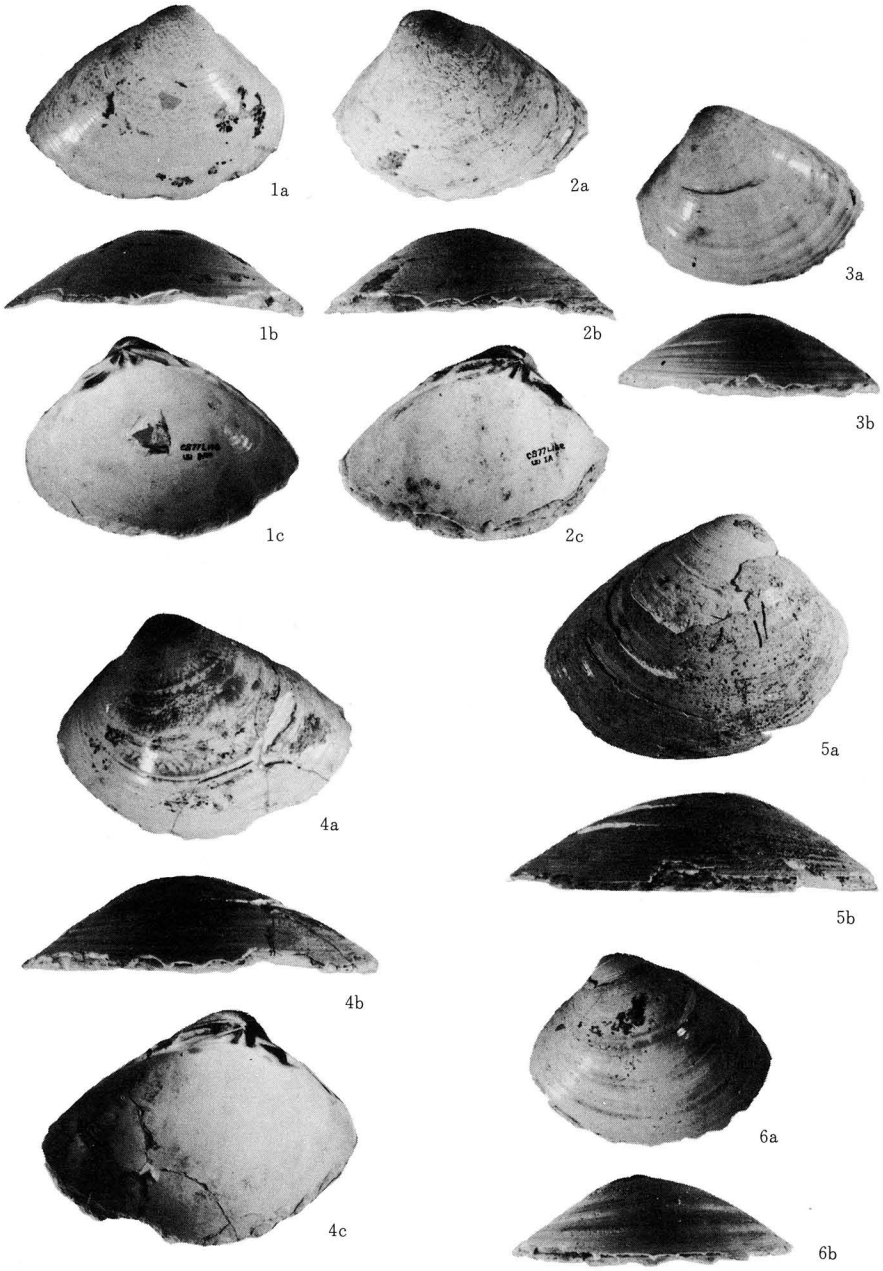
図版Ⅷ　貝 刃 図 (5)

表8　貝刃一覧表(5)

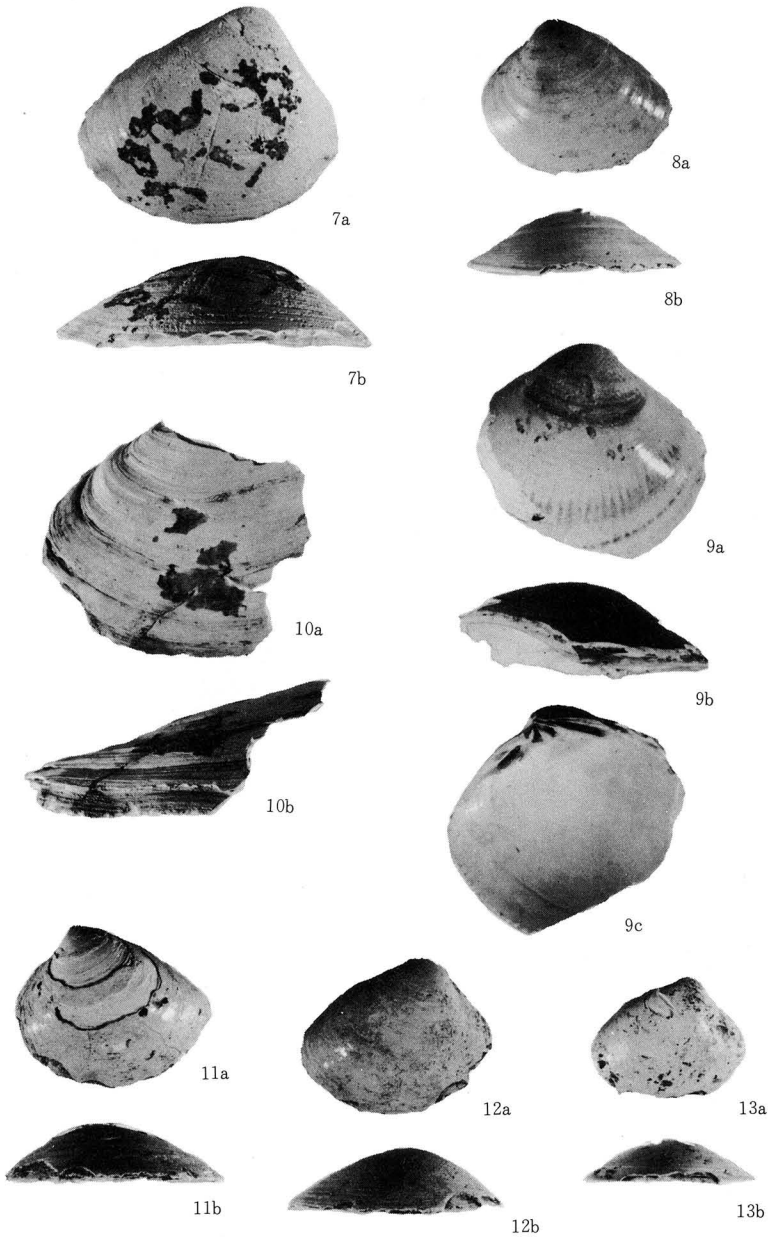
図No.	層　位	土器型式	素　　材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃　幅	長×径	備　　考	
37	L14f	大木2b, 3	ハ　マ　グ　リ	L	?	片面	二　段	2 (mm)	(45)×(40)	腹縁2/3欠。やや摩耗	
38	ピット,L1	大木1～3	ハ　マ　グ　リ	R	?	〃	二　段	1～3	(46)×48	腹縁1/4欠。光沢	
39	L14a1	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	?	?	〃	一　段	2	(42)×(19)	破片	
40	L14c	大　木　3	ハ　マ　グ　リ	?	?	〃	一　段	0.5～2.5	(55)×(28)	破片	
41	L14f	大木2b, 3	オ　オ　ノ　ガ　イ	L?	?	〃	一　段	1	(69)×(64)	腹縁3/5欠	〈写真10〉
〈CL50〉											
42	L2	大木2a	ハ　マ　グ　リ	L	腹縁全般	片面	二　段	1～5	59×48	摩耗，有機物付着	
43	〃	〃	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	二　段	1～5	43×35	摩耗	
44	〃	〃	ハ　マ　グ　リ	L	〃	〃	二　段	0～4.5	61×49	摩耗	〈写真11〉
45	〃	〃	ハ　マ　グ　リ	R	〃	〃	一　段	0～3	60×49	摩耗	〈写真12〉
46	〃	〃	ハ　マ　グ　リ	R	腹縁中 1/2	〃	二　段	1～2.5	49×37	やや摩耗	〈写真13〉
47	〃	〃	ハ　マ　グ　リ	R	?	〃	二　段	1～5	(62)×51	腹縁1/3欠。摩耗	
48	〃	〃	チョウセンハマグリ?	R?	?	〃	二　段	2～3.5	(24)×(23)	1/5残。摩耗	
49	〃	〃	チョウセンハマグリ?	R?	?	〃	二　段	2	(43)×(21)	1/4残。摩耗	
50	〃	〃	ハ　マ　グ　リ	R	?	〃	一　段	0～1	(46)×(15)	1/2欠。摩耗	



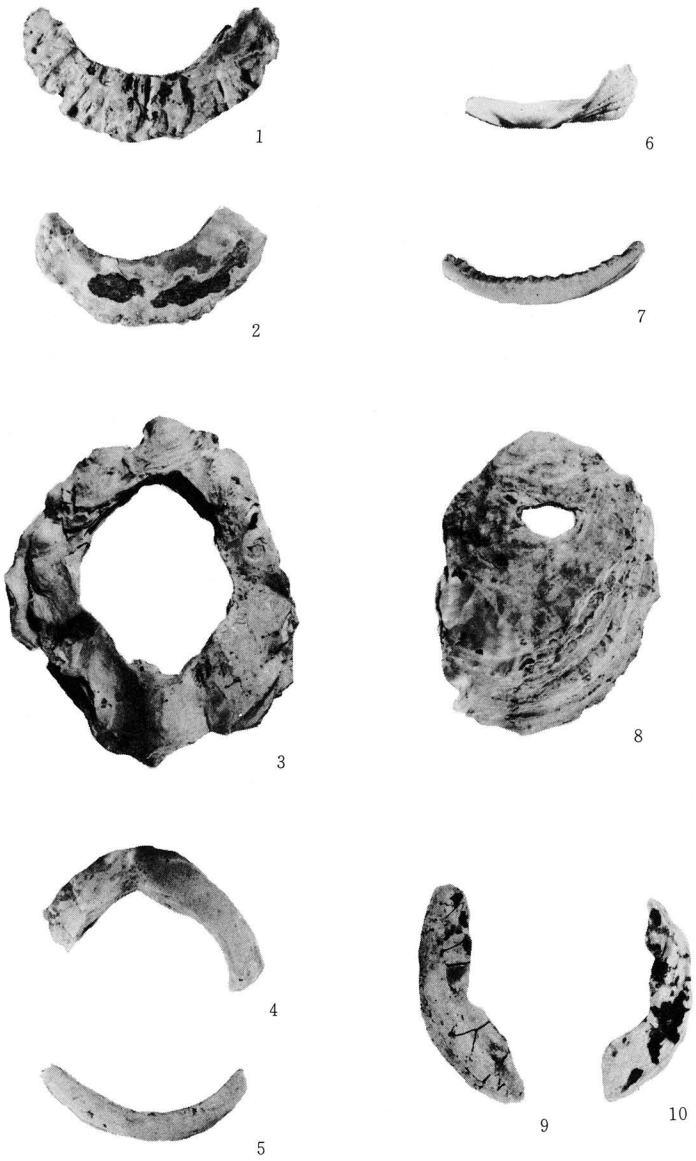
図版Ⅸ　貝 輪 図



図版X　貝 刃 写 真　×3/5



図版XI　貝 刃 写 真　　×3/5



図版XII　貝 輪 写 真　×3/5

III. 骨　角　器（図版Ⅷ、XIV、XV）

〈ＣＳ77下層〉計５点出土。内訳は櫛２、玦状耳飾、骨匕、刺器各１である。

イ．櫛（１・２）

２点とも素材（獣骨または鹿角）を縦に半截して細かい彫刻や研磨を加えた竪櫛である。１は部分的な破損が見られるが、全形復原は可能で、平面形は細長い長方形で、断面形はアーチ型を呈する。長さは、現況で18.7cmだが完形品としては20cm以上に達するだろう。内外両面とも入念に削りおよび研磨が施されている。厚さは、最も薄い上端部で１mmである。全般にきわめて薄く、破損しやすい。中軸線の上下に径４mmの円孔を穿ち、それを結ぶ形で縦に幅１mmの切りこみが入っている。周縁部には、下半2/3の部分に二重の山形の刻みと径３mmの円孔が６単位分、左右対象に配置されている。上半1/3には細かい刻みが施されている。このような装飾を施した骨角器の類例に、ＣＳ77上層出土の装飾品がある。(七ケ浜町教委、1979)上半部では径３mmの円孔が一対と小孔が一ケ穿たれるのみである。なお穿孔はいずれも両面からのものである。また、文様体を三分するかのように縦の稜線が中央の切りこみをはさんで２本入る。歯の部分との境には横方向に二条の隆線が彫りだされている。これは、骨櫛において各時期を通じて共通的に見られる特徴的なもので、裏側には見られない。樋口によれば、(樋口、1939）骨櫛は植物性櫛の模造であり、歯との境の二条線は、歯を結束した場合の紐を意味しており、骨櫛の場合機能的には意味はないが、櫛の結束部を示す「痕跡器官(Rudimental Organ)」と名づけている。歯は７本である。完存していないが現存長は8.1cmで、断面はほぼ円形である。先端にゆくほど歯と歯の間隔は広がる傾向を見せている。２は、歯を２本欠失しているがあとは完存している。歯の数は５本である。本体部分には周縁部の刻みや孔など一切見られずシンプルである。しかし、歯との間に二条線が彫り出されている点、本体中軸線上に縦の切りこみと二つの穿孔が施される点は１と全く共通している。１と比較すると全体に細身だが厚さは２～３mmと厚い。全体に研磨は入念に施され、光沢もあり、きわめて保存良好である。

時期的には、いずれも大木１～３式期の所産で、県内ではもとより、全国的にも最古のものに属する。また、これまでの県内での骨櫛の発見例はきわめて少なく、未発表のものを含めても10点内外と思われる。その中には、石巻市沼津貝塚（樋口、1939)、鳴瀬町川下り響貝塚出土例（樋口、1939）などが著名である。大木囲貝塚では過去に３点確認されている。このうち沼津貝塚出土例を除き、ほとんどが破損品もしくは破片で、今回のように本体と歯の部分とがそろってほぼ完形に近い形で発見されることはきわめて稀と言えよう。

ロ．玦状耳飾（３）

獣骨製で半欠品である。従来、石製、土製のものはしばしば発見されるが、獣骨製はきわめ

て珍しい。形態は下部がやや長く、下端が尖っているのが特徴的である。調整はきわめて精巧で、研磨も入念である。断面は、上部は逆三角形で下部は扁平である。光沢あり、保存良好である。

ハ．骨匕（4）

シカ尺骨の一端を切りとり、研磨を加えて先端を尖らせたもの。研磨はやや雑である。基部は一部破損。

ニ．刺器（5）

鳥管骨の一端を縦に半割りし、研磨を加えて尖らせた簡単なもの。

〈ＣＬ50〉計８点出土。内訳は、刺器３点、釣針２点、骨針１点、不明品１点である。

イ．刺器（６、７）

いずれも鳥管骨製で、一端を縦割りし、研磨を加えて先端を尖らせた簡易なもの。素材の幅は５～９mmである。ＣＳ77上層では獣骨および鹿角製で入念に研磨されたものもよく見られたが、それとは対照的である。

ロ．釣針（８・９）

２点出土。いずれも破損品。８は先端が残存しており、かえりがない。９は基部と先端が欠損しているが、下端部が尖り気味である点、８と形態的に若干異なっている。しかし、いずれもこの基部から鉤部への屈折部の幅が11mm、14mmと広いのが特徴的である。

ハ．骨針（10）

両端部が欠損している。獣骨の一端に穿孔し、全体に入念な研磨を施したもの。

ニ．その他（11・12）

11は小さなかえりをもつポイント状の鹿角製品である。一端が破損しているが、全体に入念な研磨が及んでいる。刺突具的機能が想定されるが確証はない。

〈参考文献〉

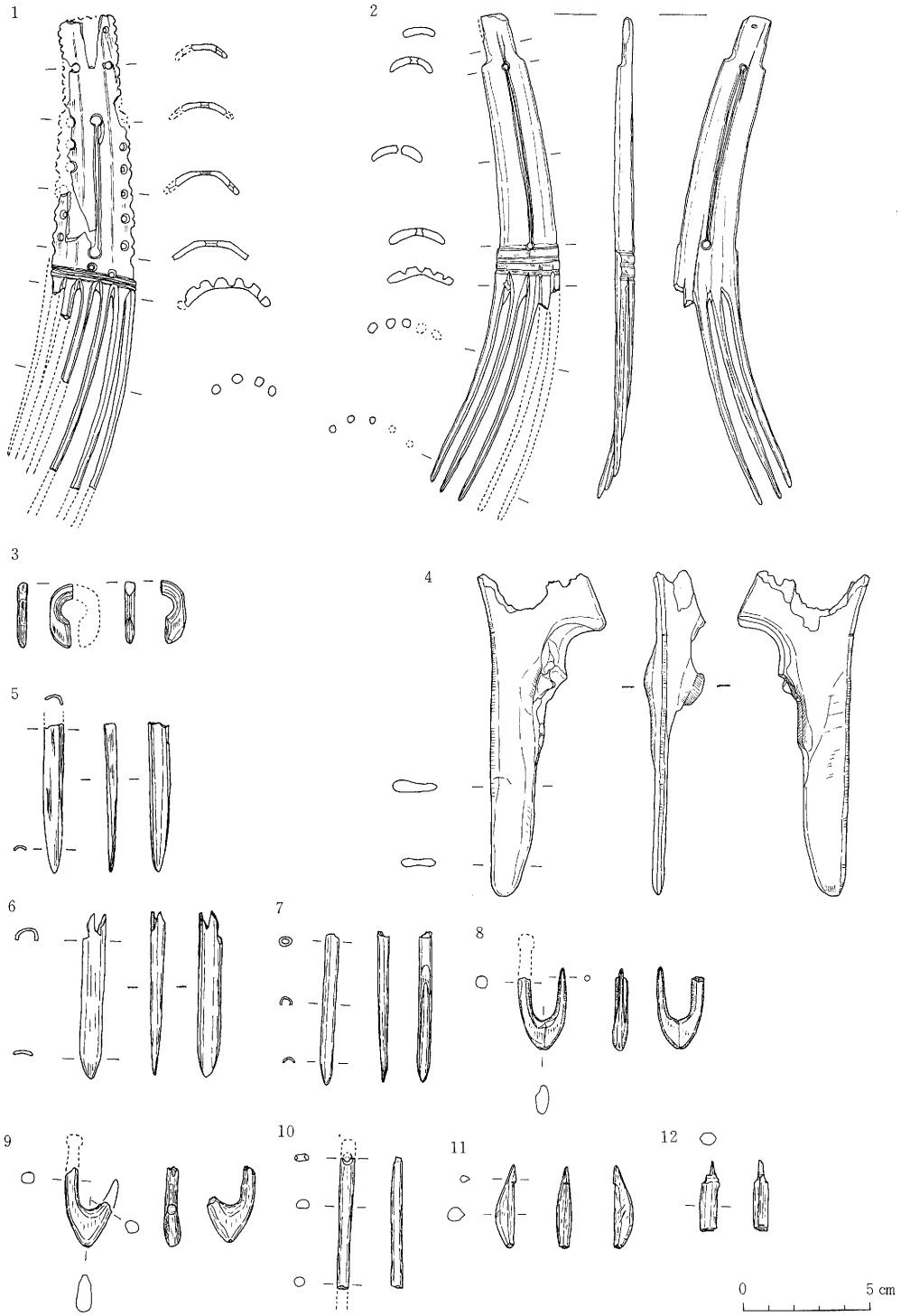
七ケ浜町教育委員会「大木囲貝塚昭和52年度環境整備調査報告」1979年３月

樋口清之「日本先史時代人の身体装飾(上)(下)」(『人類学先史学講座』13、14) 1939年12月

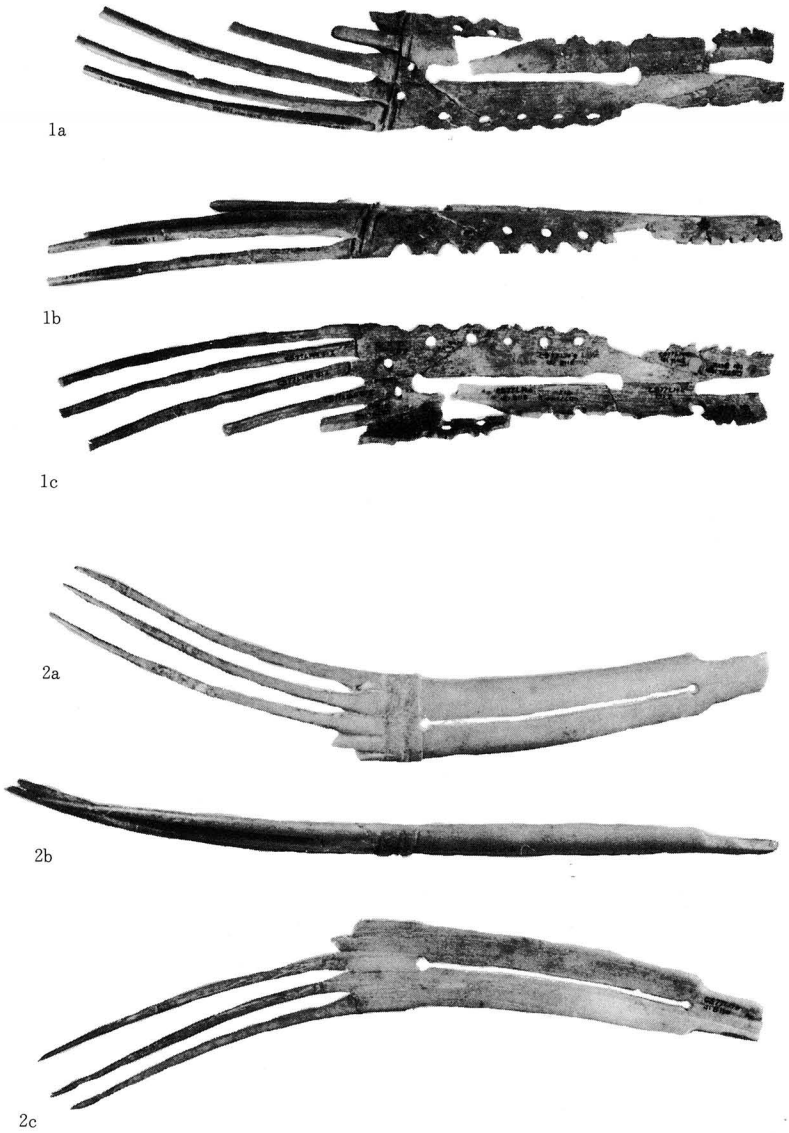
骨角器一覧表

〈CS77下層〉

図No.	層位	時期	種別	素材	成形	研磨調整	縦×横	厚	備考
1	L14e	大木2b,3	櫛	鹿角？	たてに半切	全面研磨，穿孔	(187)×34	5～11	孔は両面穿孔、光沢 〈写真１〉
2	L15a	大木1～3	櫛	鹿角？	たてに半切	全面研磨，穿孔	193×25	7.5	孔は両面穿孔、光沢 〈写真２〉
3	西壁,L5d	大木４	玦状耳飾	獣骨		全面	25×(９)	3.5	半欠。光沢 〈写真３〉
4	L14b	大木３	骨匕	鹿尺骨	一端縦割	先端研磨	127×(49)	4.5～24	先端に擦痕 〈写真４〉
5	L14e	大木2b,3	刺器	鳥管骨	一端縦割	先端研磨	(59)×7.5	1.5～4	〈写真５〉
〈CL50〉									
6	L２	大木2a	刺器	鳥管骨	一端縦割	先端研磨	(65)×９	1.5～4.5	〈写真６〉
	L２	〃	刺器	鳥管骨	一端縦割	先端研磨	(30)×７		先端、基部破損、小片
7	L2fイ	〃	刺器	鳥管骨	一端縦割	先端研磨	(59)×５	2～4	〈写真７〉
8	L２	〃	釣針	鹿角	粗割り,スリ切り	全面	(32)×19	4.5	基部欠損、かえりなし 〈写真８〉
9	L２	〃	釣針	鹿角	粗割り,スリ切り	全面	(30)×(18)	4～6	基部、先端欠損 〈写真９〉
10	L２	〃	針？	獣骨	粗割り	全面研磨，穿孔	(52)×5.5	2.5～3.5	〈写真10〉
11	L２	〃	不明(刺突？)	鹿角	粗割り	全面	(32)×７	2～5	〈写真11〉
12	L２	〃	未成品	鹿角	粗割り,スリ切り	無	(22.5)×7.5	4.5	



図版XIII　骨角器



図版XIV　骨角器(1) 櫛　×3/5

図版XV　骨 角 器 (2)　　×3/4

Ⅳ．石　　器

今回はFF60・61区、CL50区、CS77区の石器を扱った。

石器は石鏃・石匙・篦状石器・石槍・二次加工ある剝片凹み石・叩き石・有溝石器にわけられる。

石鏃とは剝片を素材とし、片面或は両面に調整が加えられた小形で三角形を呈するものをさす。基部の形態から平基・凹基・凸基にわけられるが、今回は凹基だけである。№28のように形態的には石鏃に属するが、大きさの点でその範疇に属するか不明のものもある。

意図的につまみ部を作出したと考えられる石器を石匙とする。その形態・加工は多様である。

篦状石器は八幡一郎（1935）９分類によれば凸レンズ状を呈するものと両刃状のものとにわけられるが、今回とり上げたものは前者１点だけである。

両面を平坦剝離により調整され、尖端部が作出された、柳葉形、木葉形のものを石槍と呼ぶ。

剝片になんらかの二次加工を施したものを全て、二次加工ある剝片と呼ぶ。一般には、スクレーパー・削器などに分類されるが、その基準は不明確であり、将来の研究で細分が可能になる多様な器種を含んでいると考え、今のところは二次加工ある剝片と呼びたい。しかし一器種としてなりたつものではない。なお使用痕ある剝片と称されるものも、その実態は極めてあいまいであり、一器種としてなりたつものでもないので分類項目として今回は使わなかった。

剝片はそれ以前の剝離面を残す方を背面・主要剝離面を腹面と呼び、両面加工等で背腹の区別がつかない時はa．b面であらわす。

石器は土器型式との対比が不分明なので層ごとに記述したい。

FF60．61区

層序区分が両区で違うため、別々に扱った。

〈FF60区〉

２層

１．二次加工ある剝片

打面は小さく、末広がりの形態で末端がヒンジフラクチュアーを呈する剝片の背面右側辺に調整がある。腹面石下端に、火によると考えられるはじけがある。

２f層

２．石匙

整った両面加工の縦形の石匙で、厚いレンズ状の断面を呈する。つまみ部の作り出しは浅い。

半欠

４C層

３．石匙

軽くわん曲した細長い縦形の石匙、片面加工で、背面は重り合った平坦剝離で全面が覆われる。つまみ部は小さく、幅も厚さも中央が最大である。尖端部は段のつくように細く加工されており、腹面には若干の不規則な剝離がある。

４．二次加工ある剝片

打面部と腹面両側辺に不規則な調整が施される。

４c―e層

５．剝片

縦長の剝片であるが、背面の剝離方向は一定せず、二次加工も見られない、下半が欠損している。

６．二次加工ある剝片

横長の剝片の腹面に基部を除いて全周に、連続した細い調整を行っている。背面は打面部から比較的大きな剝離が入る。

４d層

７．石鏃

無茎で基部が内わんする石鏃。b面に素材の面を残す。尖端欠損

８．石鏃

無茎で基部が内わんする石鏃・a．b両面に素材の面を残す。

９．石匙

a面右側辺は直線的で、左側辺は外わん曲する縦形の石匙。つまみ部は熱による損傷をうけ、下部はa面からの力により折損している。a面は全面平坦剝離により調整されているがb面の調整はつまみ部付近のみである。

５b層

10．篦状石器

厚い剝片の背面両側辺と末端に急角度の粗い剝離を施す。断面はかまぼこ形を呈す。

５c層

11．凹み石

長方形の砂岩両面に打撃による凹みがある。他に縦に走る擦痕が見られる。

７層

12．叩き石

下端に敲打痕がある半欠

13．石匙

縦長剝片に周辺加工を施した、縦形で末広がりの石匙、両側辺は軽く内わんし、下端も内わんする。腹面に調整はなく、下端の一方を若干折損する。

8 a層

14．剝片を折断し、打面部尖端としてその周辺に調整を加えているが側辺が折損している。石鏃の未製品とも考えられる。

〈FF61区〉

aL 3 イ層

15．二次加工ある剝片

剝片の背面右側辺に調整を加えている。下端折損。

aL 4 層

16．石鏃

無茎で基部が内わんする石鏃。両側辺はほぼ直線的である。両面に素材を残し周辺部のみを調整するが、尖端部は段がついている。尖端部折損。

bL 4 ハ層

17．石匙

比較的厚い剝片につまみ部を作出し、さらに背面に周辺調整を施し、靴形を呈する石匙。

bL 4 ニ層

18．石匙

形態的には№17に似るが素材を横に使う点が異る。腹面も打面部が特に入念に調整されている。

aL 5 層

19．二次加工ある剝片

剝片を折断し、背面両側辺と基部を調整している。

bL 6 層

20．有溝石器

砂岩製の石の両面に幅 5 ― 8 mm、深さ 2 ～ 3 mmの溝がa面に 3 本、b面に 6 本ある。

〈CL50区〉

大木 2 a式に伴出したと考えられる石器である。

I b層

21．石鏃

無茎の石鏃で基部は内わんする。b面に素材の面を残した尖端部は折損している。

２層

22．石槍

側辺が軽く外わんする。両面とも細く剥離面が重りあっている。断面はレンズ状を呈し、尖端部と基部を折損する。

23．石槍

両面が粗い剥離で調整されている。製作途中で折損した可能性もある。

24．二次加工ある剥片

背面先端部に急角度の調整を加え細いくちばし状に作り出している。打面部折損。

25．石匙

縦形石匙。背面全面を調整し、なぎなた状を呈する。

２a層

26．石匙

縦形石匙、両側辺は直線的で下端に向かつて軽く開く。両面を整った平坦剥離で調整し下端が軽く内わんする。

27．凹み石

両面のほぼ中央に敲打による凹みがあり、周辺部には擦痕も見られる。３辺が折損している。

２c層

28．石槍

両側辺がほぼ平行する大形の石槍である。両面に粗い剥離を施した後にa面側辺を細かく調整している。加工から見て、残存部は基部と考えられる。断面はかまぼこ形を呈する。

２e層

29．不　明

中央の円盤状の部分から両側に出た棒状部には横走する研磨痕あるいは擦痕が見られる。

２f層

30．二次加工ある剥片

横長の剥片下縁の両面に不規則な剥離痕が見られる。

不明層

31．二次加工ある剥片

剥片の１側辺に不規則な剥離痕がみられる。

32．石匙

両側辺のほぼ平行した縦形の石匙、両面加工であり、特にb面縁辺の調整が細い。半欠。

CS77区

1層

33．石鏃

無茎で基部の軽く内わんした石鏃、両面加工で、左右非対照である。

aL8d層

34．二次加工ある剥片

剥片を一部加工した後に両側辺を折断し、交わる部分が鋭い縁辺となっている。

l3b層

35．二次加工ある剥片

剥片の打面部折損、末端に不規則な二次加工がある。

bLl3bf層

36．二次加工ある剥片

剥片左側辺が折損し、右側辺に規則的な調整が施されている。

14d層

37．石鏃

無茎で、基部の内わんする大形の石鏃である。側辺は軽く外わんしている。銛先の可能性もある。

14f層

38．二次加工ある剥片

剥片の打面部を除去する加工を施す。

14h層

39．二次加工ある剥片

剥片の打面部と末端を背面から腹面側に調整した後に、その部分を打面として背面側にステップフラクチャーになるような調整を加えている。左側辺は折損し、右側辺には不規則な剥離が見られる。

15a層

40、石匙

片面加工。小形で尖端部に向って左側辺は軽くふくらみ、右側辺は直線的に収束する縦形の石匙と考えられるが、上部が折損しているので不明確である。

16a層

41．石匙

背面はほぼ全面調整が加えられ、腹面には不規則な剥離痕が散見する。

42．石匙

縦長の剝片・背面を急角度で調整し、側辺は先端部に向かって軽く外わんしている。腹面に調整痕はない。　（梶原　洋）

出土石器一覧（№は実側図と符号）

FF 60区

№	層位	器種	大きさ(最大長×最大幅×最大厚m)	石材	加工部位	備考
1	2	二次加工ある剝片	4.86×4.08×0.67	頁岩	背面右側辺に調整	腹面右下端にはじけ
2	2f	石匙	3.13×1.66×1.11	めのう	両面加工	下部折損
3	4c	石匙	8.97×1.57×0.82	頁岩	片面加工	尖端部、つまみ状に作出
4	4c	二次加工ある剝片	2.94×2.28×0.79	頁岩	腹面縁辺に不規則な剝離	下部折損
5	4c～e	剝片	3.5×2.0×0.62		なし	下部折損
6	4.c～e	二次加工ある剝片	2.36×4.84×0.34	頁岩	腹面全周に調整	
7	4d	石鏃	1.78×1.56×0.34	頁岩	一部に素材の面を残す。	先端折損
8	5a	石鏃	2.34×1.75×0.4	頁岩	両面に素材の面を残す。	ほぼ完形
9	5a	石匙	6.13×3.12×0.96	頁岩	片面加工	つまみ部、熱による折損末端折損
10	5b	篦状石器	4.32×3.68×1.62	頁岩	片面加工	基部折損
11	5c	凹み石	11.0×7.14×2.15	砂岩		探痕も見られる。
12	7	ハンマーストーン	8.25×5.54×3.5			半欠
13	7a	石匙	6.48×3.82×0.64	頁岩	片面加工	下端一部折損
14	8a	二次加工ある剝片	2.70×1.86×0.41	頁岩	インバースリタッチ	石鏃未製品の可能性尖端折損

FF 61区

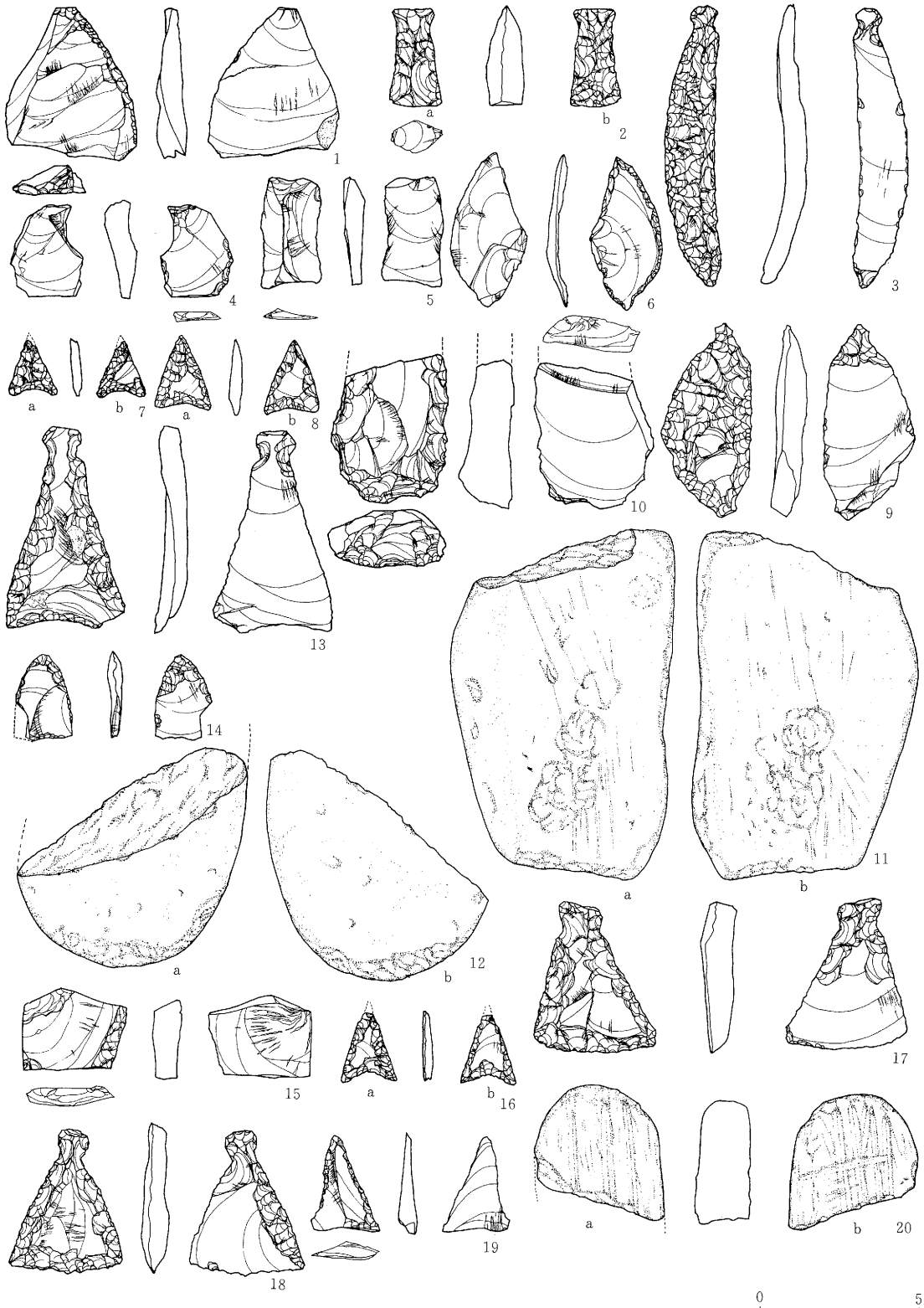
15	aL 3イ	二次加工ある剝片	3.01×3.68×0.82	頁岩	背面右側辺に調整	下半折損
16	aL 4	石鏃	2.2×1.75×0.26	頁岩	両面に素材の面を残す	尖端折損
17	bL 4ハ	石匙	5.52×3.88×0.94	頁岩	つまみ部を除いて片面加工	
18	bL 4ニ	石匙	4.62×3.63×0.91	頁岩	背面周辺調整	剝片を横につかっいる
19	aL 5	二次加工ある剝片	3.01×2.16×0.46	頁岩	背面周辺に調整	下半折損
20	bL 6	有溝石器	3.92×4.27×1.65	砂岩	表裏に9本の溝	半欠

CL 50区

21	1b	石鏃	1.58×1.13×0.22	頁岩	片面に素材の面を残す	尖端折損
22	2	石槍	6.43×1.82×0.89	頁岩	両面を重りあった平坦剝離で調整	尖端基部折損
23	2	石槍	4.48×3.64×1.50		両面を粗い平坦剝離で調整	半欠
24	2	二次加工ある剝片	4.24×2.08×0.54	頁岩	背面尖端部に急角度の加工	基部折損
25	2	石匙	6.32×2.05×0.88	頁岩	背面全面を調整	完形
26	2a	石匙	6.72×2.55×0.85	頁岩	両面を整った平坦剝離で調整	完形
27	2a	凹み石	7.82×7.08×2.12	不明		一部欠損
28	2c	石槍	7.54×3.50×1.60	頁岩	両面を粗い剝離で調整	半欠
29	2e	不明	3.86×2.08×1.67	砂岩		体部剝落し両端も欠損
30	2f	二次加工ある剝片	3.63×5.54×1.03	頁岩	剝片下端の両面に不規則な剝離あり	
31	不明	二次加工ある剝片	4.1×256×1.08	頁岩	腹面右側辺に細い剝離	欠損
32	不明	石匙	4.38×1.89×0.75	頁岩	両面を細く調整	半欠

CS 77区

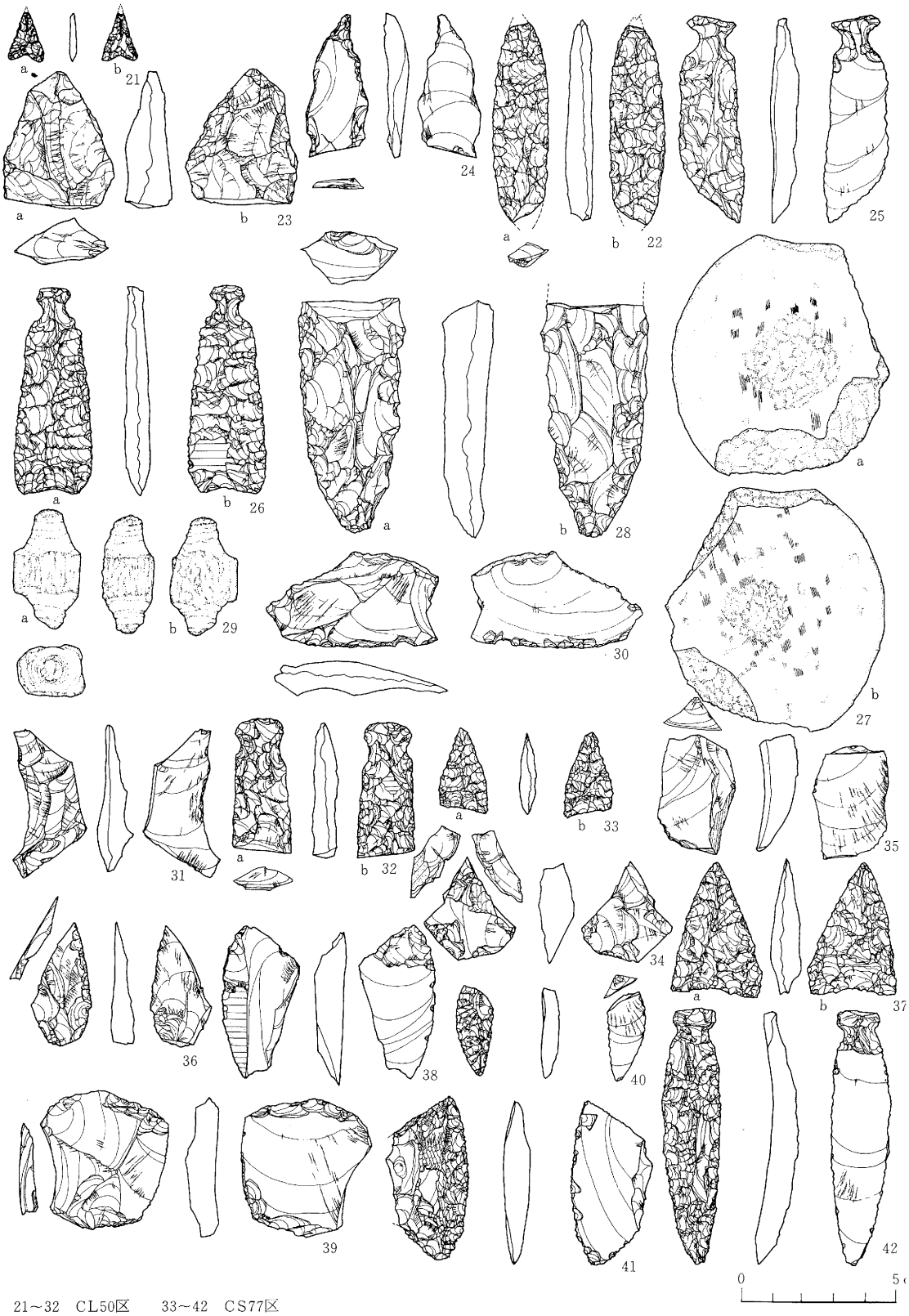
33	1	石鏃	2.75×1.54×0.48	頁　岩	両面加工	左右非対照
34	aL 8 d	二次加工ある剝片	3.28×2.94×1.02	頁　岩	折損により刃部作出の可能性も	
35	13b	二次加工ある剝片	3.77×2.44×1.04	頁　岩	末端に不規則な調整	上半折損
36	bL13b f	二次加工ある剝片	3·88×1.96×0.77	頁　岩	背面右縁辺に調整剝離	左側辺折損
37	14d	石鏃	4.2[illegible]×2.88×0.94	不　明	両面加工	無茎の石鏃に形態的に似る
38	14f	二次加工ある剝片	4.95×2.57×0.93	頁　岩	腹面打面部を除去	
39	14h	二次加工ある剝片	4.48×4.17×0.97	頁　岩	背面腹面上下に調整	背面右側辺折損
40	15a	石匙	2.93×1.09×0.55	不　明	片面加工	上半折損
41	16a	石匙	2.66×5.31×0.90	頁　岩	片面を全面細い剝離で調整	打面部折損
42	16a	石匙	8.27×1.95×0.95	頁　岩	片面加工	完　形



1～14　FF60区　　15～20　FF61区

1．2層　2．2f層　3．4．4c層　5．6．4c～e層　7．4d層　8．9．5a層　10．5b層　11．5c層　12．7層　13．7a層　14．8a層
15．aL3イ層　16．aL4層　17．bL4ハ層　18．bL4ニ層　19．aL5層　20．bL6層

図版XVI　石　　器(1)　　FF60・61区石器実測図　Scale 1/2



21～32　CL50区　　33～42　CS77区
21. 16層　22～25. 2層　26. 27. 2a層　28. 2c層　29. 2e層　30. 2f層　31. 32. 層不明　33. 1層　34. aL8d層　35. 13b層
36. 13bf層　37. 14d層　38. 14f層　39. 14h層　40. 15a層　41. 42. 16a層

図版XVII　石　　器(2)　　CL50区・CS77区石器実測図 Scale 1/2

V. ウミガメ

ここではCF42地区を中心に、CF41、CF43、CI41地区を取り扱う。出土量についてはCG41、CH42、CR41、DF45、DF48地区を加えておく。整理作業は、すべてが終了しているわけでなく、亀甲については対象としていない。なお亀甲は各地区で多量出土している。また、同定作業に不十分な点が多く、現段階で不明なものについては除外している。つまり、途中経過報告といった程度のものである。詳細については、本報告でなされることになっている。

まず上述の地区で出土した個体数は、頭骨から見て6個体以上である。これらの大きさは、バラつきがあり、亀甲の大きさで推定50cmから100cmに及ぶと考えられる。層位と接合関係については以下のとおりである。

頭　骨　CF42L7b—f—g, CF42L7f—h, CF42L6a—L7g, CF41L5—CI41L5

marginal　CF42L7f—g

さて表11、12を見ると、頭骨はCF42L7f、L7gに集中している。頚椎はCF42L7c、L7fに集中し、前後肢関係ではCF42L7c、L7fを中心に全体的にばらつき、またCI41L5からまとまって出土している。marginalはそれほど集中度がなく、CF42地区以外ではCI41L5に集中しているのが目立つ程度である。頭骨が他の骨と違った出土状況を呈していることが提起できよう。つまり頭骨以外の骨がより上層から出土している。左右骨の分布差については指適することが出来ない。層位について触れておくと、アルファベット小文字で記されている細かい層位（註1）は、それほど時間差がない点を指適できる。しかし遺物の遺存状況など他の要素を加味しなければならないので、上述の点は参考程度にとどめたい。

さて大木囲貝塚から出土したウミガメは如何なる種類のものか。結論から先に言えばアカウミガメである。亀甲からは、アカウミガメかアオウミガメであることが理解される。さて現在まで理解された両者の違いは、主に肩甲骨とxiphiplastronにある（図版XIX）。肩甲骨につては同大のカメで比較するとすれば、アカウミガメの方が小さく、先端近くの巾が広く、ずんぐりとした感じである。xiphiplastronはhypoplastronに取り付く部位の形態が違う。アオウミガメはいわゆるS字状に近い形態をしているが、アカウミガメのそれは直線的である。以上が一見してわかる違いだが、頭骨についても鼻骨の立ち上がりがアオウミガメの方が強い。つまり、額が高い。以上の点から、大木囲貝塚出土のものはアカウミガメと理解された。図版XVIIIにアオウミガメ（2～3才？）の頭骨、亀甲の実測図を載せているので参考にされたい。

以上記すにあたって、標本作成には松島水族館にお世話いただいた。また各部位名称については、小宮孟、梶原洋、松井章の諸氏に御教示していただいた。感謝の意を表したい。（佐久間豊）

（註1）八巻正文 1978 大木囲貝塚—昭和49年度環境整備報告—七ケ浜町文化財調査報告書第3集（PP1～2）

表11　大木囲貝塚各地区・各層位ウミガメ出土量（1）

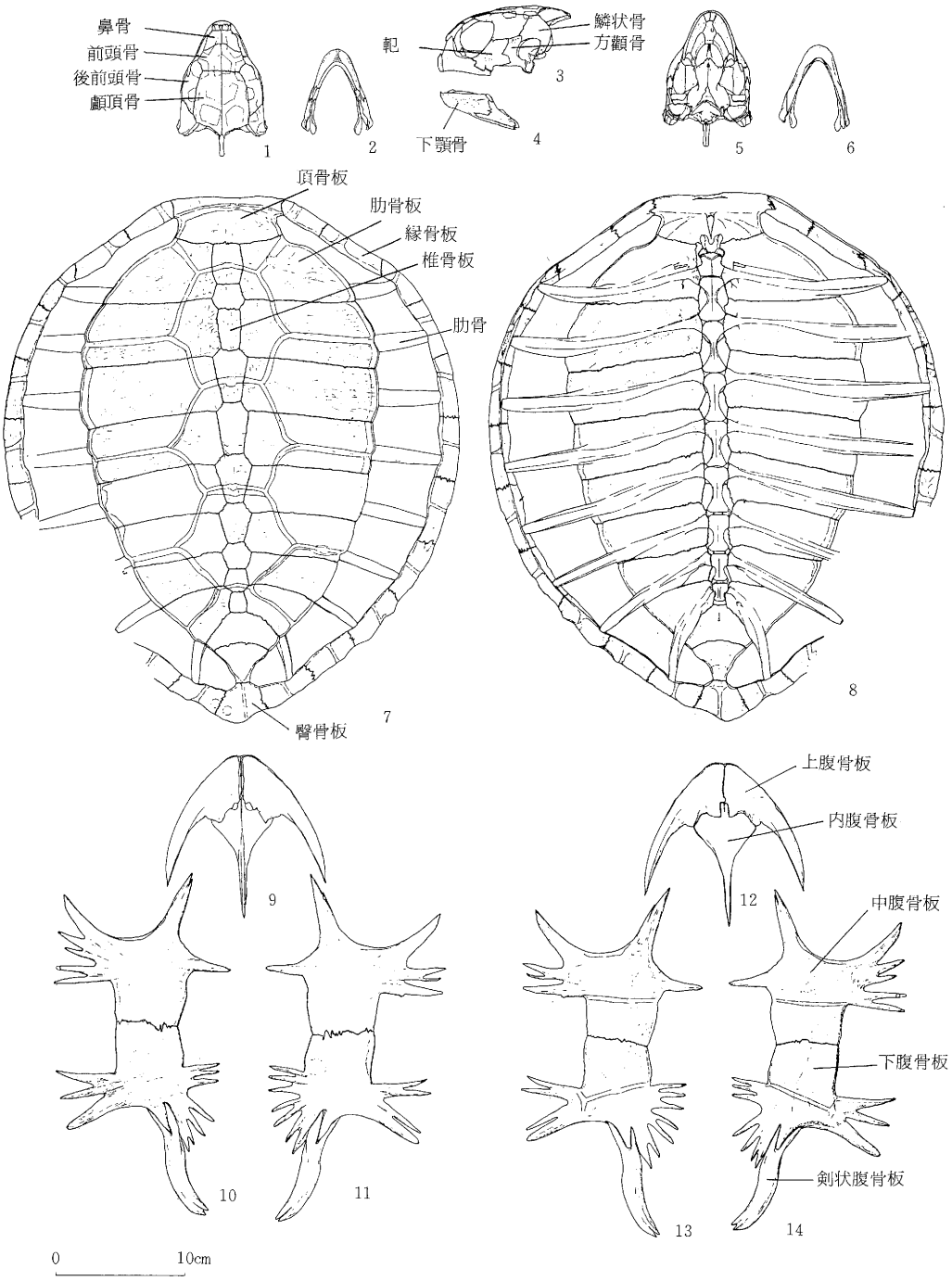
部位	頭骨																		頸椎							仙骨椎	尾椎				上腕骨		橈骨		尺骨		大腿骨		脛骨		烏喙骨		肩甲骨		腕骨		指骨		距骨		蹠骨	
	鼻骨		前頭骨		上後頭骨		顱頂骨		前上顎骨		上顎骨		耙骨		方頬骨		下顎骨		1	2	4	5	6	7			1	5	5〜7	10・15																						
地区・層位	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r			ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r													ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r
CF42表土					1				1		1												1												1						1		1		1		4	6		1		
L6a		1	1												1		1																																			
L6c																																													1							
L7																								1							1																			1		
L7a																																																1				1
L7b						2		1		1		1															1	1					1								1						1	1		1	1	1
L7c																				1	1	1	1	1						1		1	1	1				1						1		2		1		
L7d		1																	1																															1		
L7f	1	2	1	1	1				1			1			1	1			1	3	1			1									2					1	1		1			1		2			2		1
L7g	1	1	1	1		1		1		1		1		1	1											1														1	1					1	1				
L7h		1			1								1																1																1				1		
L8a																														1																						
L8b			1																																																	
CF41L5			1																																																	
L6																																																				
L7f																																																				
CF43L6a																														1																						
L6b																														1																1					
L6c																																																				
aL7b																																																				
bL7b																																																	1			
CG41表土																																																				
L4																																																	1			
L5																																																				
CH42L4																					1																										1					
CI41表土																																																				
L5			1																					1									1	1	1										1	3	1	1			1
L6									1																												1															
L7																																																				
DF45L2a																																																1					
DF48L1																																																				

※頸椎・尾椎番号はそれぞれ、1は第1頸椎のようになっている

表12　大木囲貝塚地区・各層位ウミガメ出土量（2）

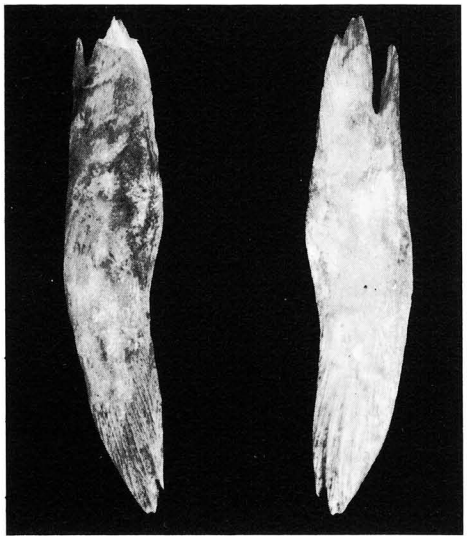
部位	頭甲板	縁甲板																								臀甲板	肋骨	上腹骨板	下腹骨板	剣状腹骨板	
		1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		不明							
地区・層位		ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r					ℓ	r		ℓ	r
CF42表土	1													1								1		3					1			
L6a																																
L6c																				1						1						
L7												2												3								
L7a																								1					1			
L7b						1		1										1		1												
L7c										1														1			1		1			
L7b																																
L7f						1		1								1								6								
L7g																								5								
L7h														1		1						1										
L8a																																
L8b																																
CF41L5																																
L6				1																												
L7f																																
CF43L6a																																
L6b																								1								
L6c																																
aL7b										1		1																				
bL7b																																
CH42L4																								1								
CI41表土																								1								
L5						1												1				2		3			5		3		1	
L6						1																1							1			
L7													1																1			
CR41L1						1																										
DF45L2a																																
DF48L1																																

※縁甲板番号は図と対応

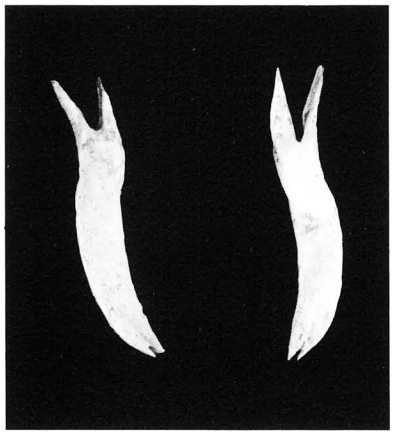


1 頭骨背面　2 下顎骨腹面　3 頭骨右側面　4 下顎骨右側面　5 頭骨腹面
6 下顎骨腹面　7 背甲背面　8 背甲腹面　9・10・11 腹甲腹面　12・13・14 腹甲背面

図版XⅧ　アオウミガメの頭骨・背甲・腹甲

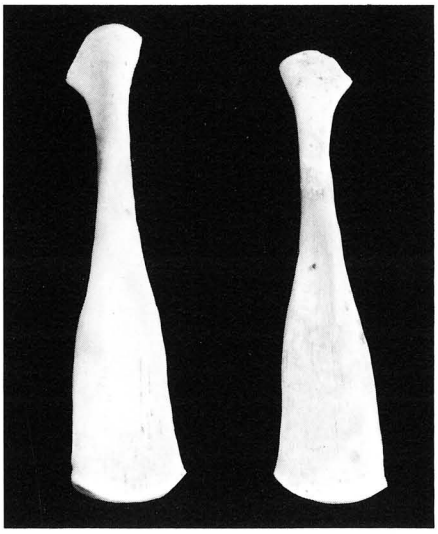


1



2

3



4

1：アカウミガメ剣状腹骨板

2：アオウミガメ剣状腹骨板

3：アカウミガメ肩甲骨

4：アオウミガメ肩甲骨

図版XIX　ウミガメ標本写真

あ と が き

昭和52年、53年の２年度にわたって調査したCS77地区は、縄文時代前期（大木１～６式）の文化層が約5.5mにわたり堆積していた。土器編年の基準となった大木囲貝塚の偉大さをまざまざと見せつけられた次第である。さらに、縄文時代中期（大木７～10式）の文化層が１地点で良好に堆積している場所が発見できれば、編年の基準となった大木囲貝塚をこれらの２地点で表わすことができる。しかしこうした地点がそう簡単に発見できるわけではない。

大木囲貝塚では昭和50年度から、東北大学工学部の山口　格教授の指導により貝層保存実験を行って来た。CS77地区でも仮の保存小屋を覆せ保存展示を試みた（八巻正文他　1979 P. 67)。東京国立文化財研究所の樋口清治氏に見ていただいた結果、発掘区が狭く、丘の中腹に位置し適度に湿り気があり壁に亀裂ができるのを防いでおり、陽当りの良い斜面にあり冬の凍結を防いでいる等、好条件が重なり、非常に良く保存されているとの診断をいただいた。しかし水分の少い断面上部では亀裂が入っている。このような貝層保存実験から判断して、CS77地区は当分の間埋もどして保存するのが賢明と判断する。

文化財の活用という点から考えると、発掘や貝層の展示は最も重大な事業である。昭和48年度から53年度にかけて行われた発掘調査は、整備のための基礎資料を得ると同時に、多くの人人に見学していただいたので、文化財の活用も大いにできた。発掘に当っては、できるだけ多方面の分野の研究者に協力指導していただくようにつとめ、最高水準の調査を行うよう常に心がけて来た。今後はこれまでの６年間に発掘した資料を整理し報告し、研究者をはじめ、一般の人々もこの貴重な資料を活用できるようにせねばならない。

昭和54年３月30日、指導委員である丸田頼一博士を霞ケ関ビルに訪ね、大木囲貝塚の環境整備計画について御指導をいただいた。その主たる内容は以下の通りである。

１．正門の右手にビジターセンター及び駐車場の建設用地を早急に用意する。

２．遺跡内を横ぎる２線の電柱を移転する。

３．植生調査が終ったので、植栽計画図をつくらねばならないが、それには史跡としての、しっかりした将来の計画図をつくってもらわねばならない。

４．史跡境界には境界杭だけでなく囲柵が必要である。周囲の開発が進むにつれ境界侵害も激しくなるだろう。囲柵はフエンス（金網）をつかったようだが、フエンス（金網）はchicken house と悪口されるように、あまり景観の良いものではない。そこでフエンスを張る場合には境界線から１～２m内にし、境界とフエンスの間に植栽するのが良い。

５．史跡の土地買上げ以後をふり返ってみると、史跡地区の買上げと同時に、ビジターセン

ター建設用地として、現在の正門の南の土地を取得しておくべきであった。土地買上げの次は境界にしっかりした囲柵をする。その次に環境整備のための基礎調査（発掘及び植生調査等）を行う。この調査をもとにはじめて環境整備を行い、同時に発掘によって得られた資料の整理・研究を行い研究者をはじめ、一般の人々が資料を利用できるようにする。

6．環境整備は「歴史公園」づくりをした方が良かったのではなかろうか……。

昭和47年度から始まった環境整備事業は調査と整備が並行してなされたため、さまざまの支障があった。例えば苑路ができるとその管理に予算が食われた。年五回は刈払いをしないと道路に草や竹がはえてつかいものにならなかった。少ない予算を基礎調査と整備で分けた上、整備した地帯の維持管理にも費用がかかったので、調査も整備も思うように進まなかった。「整備が始まって何年にもなるのにいつになったら整備が終るのか」という声も多く耳にした。

ともかく、大木囲貝塚を国指定史跡として、約20万㎡もの広大な地域を保存しえたことは、研究史上これ以上の功績はなく、ここに土地買上に尽力された関係者に対し、厚く敬意を表したい。今後は保存においてはもちろん、環境整備においてもまた研究においても、日本一の貝塚になるよう努力せねばならない。

（八巻　正文）

七ヶ浜町文化財調査報告書第５集
大　木　囲　貝　塚
―昭和53年度環境整備調査報告―

昭和55年３月20日印刷
昭和55年３月31日発行

発 行　七ヶ浜町教育委員会
宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮字丑谷部５－１
印 刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　電話（63）１１６６